TSUMAMA II

02

都萬麻 II

つまま

高岡芸術文化都市構想

富山大学芸術文化学部

都萬麻Ⅱ

つまま

高岡芸術文化都市構想

02

富山大学芸術文化学部

都萬麻Ⅱ

（つまま）

高岡芸術文化都市構想

02

富山大学芸術文化学部

発刊にあたって
―活性化度を測る指標「コミュニケーション量」―

武山 良三
RYOZO TAKEYAMA

■求められる右肩上がりという発想からの脱却

富山県の人口減少が止まらない。平成30年12月1日付けと、10年前の平成20年10月1日付けのデータとを比較すると、舟橋村を除く14市町すべての行政区域で少なくなった。減少率は平均で7・1％、高岡市は5・1％、一番下がったのが朝日町で18・5％、次いで氷見市が13・5％（＊1）であった。人口減少に比例するかのように中心市街地はシャッター街となり、高岡では、江戸時代以来の発展を支えて来た金屋町や山町筋といった歴史的街区が世帯減少に悩んでいる。人口ピラミッドは逆三角形型になり、この先10年で衰退はさらに加速することが予測されている。

このような状況に対応し、行政を中心に関係者がさまざまな対策を講じているが、成果が実感される迄には至っていない。商店街から地場産業、まちづくりイベントまで対策が行われる度に「活性化、活性化」と呪文のように唱えられるが、果たして何を指して活性化できたと評価するのか目標が見えない。人がより多く集まる、売り上げが上がる、結局まちの経済規模が大きくなることだけを想定しているとしか思えない。しかし、冒頭で述べたように都市の基盤を支える人口が減少の一途を辿っている今日、右肩上がりに増加することを目標としても、それは現実に目を背けた幻想としか言いようがない。

＊1 出典：「富山県人口移動調査」県統計調査課

筆者は平成20年より高岡鋳物発祥の地・金屋町でまちづくりイベント「金屋町楽市ｉｎさまのこ」を行ってきた。各年の参加人数は2日間で概ね2万2千人～2万6千人の間で推移している。右肩上がりを目指すなら毎年せめて10％は増加させたいところだが、次の10年で来街者を3万5千人にできるかと言えば、それは相当厳しい。人口が減っているのだから、多少増えても現状を維持するが関の山になるからだ。

右肩上がりの目標には対応力という課題も突きつけられる。イベントの目玉は日頃は見られない町屋内部の見学だが、現在でもピーク時には玄関に靴が置けない程混雑し、作品や町屋を落ち着いて見られない状況だ。これ以上見学者が増えると押し合いへし合いになり、作品や家具を破損する恐れもある。食事場所やお手洗いもパンク状態になり、見学する側は不満を感じ、主催者側は疲弊、二度とイベントなどしたくないという心境になってしまうだろう。この構造は短期のイベントだけでなく、長期的なまちづくりについても同様なことが言える。人口が増えれば、それに合わせて小学校から高齢者施設まで社会サービスの充実など、際限なく投資や開発を進めて行かねばならなくなるからだ。

■活性化度を「コミュニケーション量」で測る

21世紀になり、日常生活がものに溢れ、取り立てて欲しいものがなくなってしまった今日、かつて満足感を得ていた要因は様変わりした。欲しいものを買い漁るのではなく、必要最低限のものだけで暮らす。簡素でエコロジカルで健

康的であることに満足を感じる傾向が現れている。「断捨離（＊2）」が流行語になったことは、その表れだろう。人数や金額など数の増加を目標とするのではなく、心が満足することを目標とすること、持続可能なまちづくりを目指していくことが求められている。

人口減少が深刻な富山県にあって、唯一舟橋村の人口が増えている。平成20年2，904人が平成30年には3，086人になった。しかも転入者の多くが子育て世代で、同村の15歳未満が占める年少人口割合は18・4％、県内トップである（＊3）。その要因としては、富山市近郊にあるという地理的優位性に加えて、駅に図書館を設置するなど心の満足を優先した事業を行ったことが要因として挙げられている。来館する子供達やお母さんに必ず声掛けをするなど、コミュニケーションを重視した取り組みが功を奏していると考えられる。

暮らしにおけるコミュニケーションの充実欲求は、都市部の子育て世代にも見て取れる。相模原市北端にある藤野地区に東京から子育て世代が移住し話題になっている。ここでは独自の地域通貨「萬（よろづ）（＊4）」が推進力になっている。地元の農家から野菜をいただくと、例えばそれを2百萬と値付けする。移住者は、家の片付けを手伝ったり、インターネットの使い方を教えたりすることで2百萬分を返すという仕組みだ。そこには貨幣があるわけではなく、お互いのやりとりを記録した通帳があるだけだ。ポイントは通帳にはお互いの名前を記載するようになっていること。そのことによって、地域通貨という形式をとっているものの、中身はコミュニケーションツールとして機能している。数ではなく質を求めるこれからの社会。その質を担保するのがコミュニケーションだ。

＊2　やましたひでこ著『断捨離』（ダイヤモンド社）で紹介されたことば。断捨離の基本は、モノを「断」ち、ガラクタを「捨」てれば、執着も「離」れていく、その本質は「出す」美学であると語られている。平成22年、ユーキャン新語・流行語大賞にノミネートされた。

＊3　平成27年度資料出典：とやま統計ワールド

＊4　藤野地域通貨よろづ屋 https://fujinoyorozuya.jimdo.com

このような背景から楽市では、学生同士や学生と地域関係者とのコミュケーションが促進されたかで活性化を測ることにした。学生はイベント開始当初はボランティアとして参加していたが、平成26年度からは芸術文化学部で新たに制度化された「プロジェクト授業（＊5）」を履修する形で参加した。その教育成果を測るため、コミュニケーションに関するアンケートを行ったところ、学生同士では80％以上、学生と地域関係者との間では40％以上の学生が「コミュニケーションが深まった」と回答した（＊6）。自由記述では、「高岡についての知識が深まった」「自分が知らない世界を見せてもらえた。自分の知らない人と交流するのが、こんなにも面白いのかと思った」などの記述があった。住民からは、「学生さんと話せて楽しかった」「な～んもよーないと思っていた家に感心してもらえた」など活力を得たことや暮らしを再評価するコメントがあった。スマホにＳＮＳといった最新のＩＴを活用し、クールなコミュニケーションに長けた学生達だが、一方で五感を使ったホットな会話を求めていることがわかった。舟橋村や藤野地区、そして学生達の様子から「コミュニケーション量」をこれからの活性化指標に位置づけてはと考えるのである。

芸術文化学部が高岡市と結んだ連携協定の中で出版している『都萬麻Ⅱ』では、移住定住を大きなテーマとしているが、第2巻となる本巻では住みたいまちをつくる試みを集めている。それぞれの事例の中で、人々が何に魅力を感じて取り組んでいるか、その中でどのような質のコミュニケーションが行われているか。その事に思いを馳せていただくことで、現状を少しでも改善していく動きに繋がればと願うばかりだ。

＊5　一定の条件を満たしておれば通常の時間割外に学外で行っても授業と認められる制度。

＊6　「地域連携授業の課題と効果―『金屋町楽市ｉｎさまのこを事例に』―」芸術工学会No.77 P.28～29に詳細

発刊にあたって ―活性化度を測る指標「コミュニケーション量」― 富山大学芸術文化学部長 武山 良三 2

特集 まち空間の再生と創造

はじめに ―まち空間をつくるということ― 島添 貴美子 8

土地の記憶の発掘・継承・発信の試み ―サウンドスケープの考え方と日々の暮らしから― 鳥越 けい子 14

街の〝仮説性〟 林 匡宏 24

地方都市魚津における駅周辺のまちづくり ―新・旧市街地の岐路― 阿久井 康平 36

公共空間をまちへ文脈化する ―北本らしい〝顔〟の駅前つくりプロジェクトを事例として― 籔谷 祐介 50

万葉ベビーカー行脚 ―子育てからみたまち空間・高岡とその周辺― 籔谷 智恵 62

宿泊体験施設「さまのこハウス」 横山 天心 74

吉久の町家×芸文 ―学生シェアハウス計画の始動― 萩野 紀一郎 80

はじめに
―まち空間をつくるということ―

島添 貴美子
KIMIKO SHIMAZOE

■人とまち空間

本誌は、富山県高岡市と富山大学芸術文化学部の連携協定の一環として、２０１２年より発行が始まった『都萬麻』の第２期第２巻である。第２期では特集と銘打って、テーマを絞り込み、各方面でそのテーマに取り組んでおられる方々から寄稿いただくことで、様々な視点から、特集テーマを深堀している。

本巻の大きなテーマは、第１巻に引き続き、移住定住である。第１巻では、移住定住をソフト面（ひと）に焦点をあてて深堀したが、本巻では「まち空間の再生と創造」に焦点をあてて、住みたいまちをつくる試みを特集する。

「まち空間の再生と創造」というと、たとえば駅前再開発や、道路や公共施設といったインフラの再整備など土木・建築の見識や技術が欠かすことができない。しかし、同様に、あるいはそれ以上になければならないのが、まち空間に生きる人々の存在と彼らの思いである。

２０１８年７月11日付の読売オンライン「迫る『超ソロ社会』…ひとりで死ぬのは宿命なのか？」という記事（＊1）によると、既婚未婚を問わず独身者が国民の過半を占める「超ソロ社会」の到来にむけて、孤独死に対する社会的な関心が高まっているという。この記事で紹介されているのが、「ホームホスピス」や認定ＮＰＯ法人エンディングセンターによる「桜葬」である。「ホームホスピス」とは、「住み慣れた地域の中にあるもう一つの『家』にケアを必要とする人々が暮らし、ホスピスケアのチームが入ってサポートする仕組み」（＊2）であり、ＮＰＯ法人エンディングセンターによる「桜葬」では、桜葬墓地の近くに一軒家を設け、定期的に会員が集うことで、生前より「墓友（はかともだち）」（＊3）を作る活動を支援しているという。人々が人生の最期まで独りではないことを実感しながら生きていくことができるような社会とは、これからの理想的な社会の形なのかもしれない。そして、こうした社会をつくるためには、大なり小なりの程度の差はあれども、まち空間を再編していくことが不可欠である。

■まち空間の再生と創造

本巻は、「まち空間」を切り口に、アーティスティックなまち空間の創作、産官学の連携による市民主体のまちづくり、そしてまち空間からみた高岡の３つのトピックスで構成されている。

まず、アーティスティックなまち空間の創作として、鳥越けい子氏と林匡宏氏に寄稿いただいた。お二人は、それぞれ、ご自身の専門を生かして、まち空間の創造に携わっている。

鳥越氏は日本におけるサウンドスケープ研究、およびサウンドスケープ・デザインの第一人者である。サウンドスケープ（音風景）を意識しながらまち空間を眺（ぎょう）めると、普段、視覚に頼りがちな感覚では気づかない様々な発見がある。鳥越氏が、１９９０年頃に手掛けた大分県竹田市の瀧廉太郎記念館における「音

＊1　藤和彦「迫る『超ソロ社会』…ひとりで死ぬのは宿命なのか？」読売オンライン２０１８年７月11日
https://www.yomiuri.co.jp/fukayomi/ichiran/20180706-OYT8T50021.html

＊2　一般社団法人全国ホスピス協会のＷｅｂサイトを参照のこと。
https://homehospice-jp.org/

＊3　認定ＮＰＯ法人エンディングセンターのＷｅｂサイトによると、「墓友」とは、「同じ理念の墓を選んだ人たちの交友関係の一つ、あるいは仲間意識をいう」という。
https://www.endingcenter.com/friends/

風景からの庭づくり」は、明治時代に活躍した作曲家滝廉太郎が子供の頃に体験したサウンドスケープを我々が追体験する、いわば音のリノベーションである。鳥越氏のサウンドスケープ・デザインは、音のリノベーションにとどまらず、２０００年以降、鳥越氏自身が生まれ育った善福寺池とその周辺地域で展開している。アートによるまちづくりイベントの一環として、２０１０年より始まった「池の畔の遊歩音楽会」は、東京都杉並区の善福寺池を舞台に、この地にまつわる民話や歴史、自然を題材とした歌やパフォーマンスを仕掛けていくが、ここで歌われ、演じられた作品たちは音楽会が回を重ねるごとに、この地に蓄積されていく。この音楽会は地元の人々のリピーターも多く、「個人の表現」であるアートが、この地の人々の「共同体の表現」になっていくのか、鳥越氏の模索は続いている。

一方の林氏は、まち中に偏在する空き地・空き家や工事中の空間といった常設の状態ではない、いわば一時的な「仮設空間」を、まちづくりの実験場としての「仮説空間」とみなして、様々なアートプロジェクトを仕掛けている。林氏がこうした「仮説空間」において試みていることは、その空間とそこにいる人々の潜在力を掘り起こし、顕在化することである。しかも、こうしたプロジェクトをやること自体が目的ではなく、これをきっかけに、新しい人的交流や仕組みがつくられていくことが期待されている。このような林氏の試みは、どこまでも確信犯的にまち空間を創造していく。

阿久井康平氏と籔谷祐介氏は、産官学の連携によるまちづくりを例に、市民目線のまちづくりの重要性を改めて教えてくれる。

阿久井氏の「地方都市魚津における駅周辺のまちづくり」は、富山県魚津市において、駅周辺で現在進められているまちづくりを取り上げている。ここでは、駅を単なる交通インフラとしてだけではなく、駅を中心としたまち空間に再編することで、生活や産業・観光を活性化する可能性が論じられている。２０１７年８月から産官学によってつくられた魚津駅・新魚津駅周辺まちづくり協議会がうちだした方向性は、①駅によって東（山側）と西（海側）に分断されている市街地のシームレス化（分断の無い状態）、②駅から２５０ｍ徒歩圏域内の生活機能の拡充、③駅と観光コンテンツ間のアクセスの改善である。特に、①と②はまち空間のコンパクト化であり、人口減少や高齢化を意識したまちづくりでは欠かすことができないと思われる。

籔谷氏の「公共空間をまちへ文脈化する」は、ハコモノ行政の反省から生まれた公共空間の市民参加型デザインの例として、埼玉県北本市の「北本らしい〝顔〟の駅前つくりプロジェクト」を取り上げている。北本市は東京のベッドタウンであるが、これから予想されるコミュニティの超高齢化にあたって、駅前広場を「交通広場」から「交流広場」へと転換させることで、中心市街地の活性化が期待された。このプロジェクトは、単なる駅前広場の再開発にとどまらず、まち全体を調査し、市民参加のワークショップを重ねることで、まちづくりプロジェクトへと発展し、駅前広場の改修後もまちづくりマネジメントの体制が引き継がれている。このプロジェクトは、多くの市民が関わっているが、議論が混乱・迷走しにくい体制づくりによって、市民が主体的にまちづくりに関与できたところにプロジェクトの成功要因があると思われる。

ここからは富山県高岡市を例に、まち空間からみたまちづくりを扱う。

まず、籔谷智恵氏は、２０１８年に高岡市へ転入し、現在、初めての子育ての真っ最中である。富山型子育てといわれるように、富山県では子育てに夫婦の両親（子供にとっては祖父母）が積極的に関与することが一般的である。そんな中、夫婦ともに実家から遠い高岡市で、しかも初めての子育てを経験するのはどんなにか心細いだろうと思う。そんな籔谷氏には、子育て中のママ目線で高岡をみていただいた。土地勘のないママにとって、信頼できる病院や保育園、安全な遊び場がどこにあるかは分からない。そこでまず、籔谷氏がやったことは自らベビーカーを押して、まちに出ることだった。そして、そこで発見されたことは、子供が過ごすことを前提として作られた安心・安全で便利な空間とそうでない空間があり、前者の空間には、子供だけでなく、多くの人も集まるということであった。ところが、「若いママが思う以上に子供の価値を教えてくれるのは、後者の空間にいる人々である」と籔谷氏はいう。不便な空間だからこそ、人々は互いを見守り、助け合っている。そこには古き良き時代のコミュニティが、今でも生きているといえるだろう。

横山天心氏と萩野紀一郎氏からは、高岡市内における富山大学芸術文化学部のプロジェクト授業の成果を報告いただいた。これらのプロジェクトの成果は、いずれも地域住民有志による草の根の団体との協同抜きには語ることはできない。

横山氏の「宿泊体験施設『さまのこハウス』」は、高岡市の中心市街地、金屋町の住民による草の根のプロジェクト「金屋町元気プロジェクト」と富山大学芸術文化学部との協同によって実現した古民家再生の一例である。現在ではトレンドとなっている古民家再生とは、古民家の良さを生かしつつ、現代生活に合った形にリノベーションすることである。「さまのこハウス」は移住希望者のための長期滞在用の施設として再生された古民家だが、さまざまな規制や制約、予算の問題等々を乗り越えて、単なるリノベーションを超えた「伝統的なのに創造的」な魅力ある空間を作り出すことができた例といえるだろう。

萩野氏の「吉久の町家×芸文―学生シェアハウス計画の始動」は、高岡市吉久地区を例に、歴史的な街並み保存と少子高齢化・空き家・空地の増加問題を両立させるべく新しい生活環境を作り出す試みである。萩野氏自らが吉久地区借りている町屋（旧藤田家）を学生シェアハウスにリノベーションする計画は途に就いたばかりだが、吉久地区の住民による「ＮＰＯみらいプロジェクト」との協同が今後のカギとなるだろう。

本巻のすべての論考が、さまざまな規制や限りある予算の中で、まち空間の再編に知恵を絞り、試行錯誤する苦労が垣間見られる。それと同時に、こうした試みが、その空間に生きる人々の積極的な関与があって初めて実現するものであるといえよう。執筆者たちとまちの人々の協同作業によって生まれた物語をぜひお楽しみいただきたい。

土地の記憶の発掘・継承・発信の試み
―サウンドスケープの考え方と日々の暮らしから―

鳥越 けい子
KEIKO TORIGOE

1．はじめに

私の故郷は、東京杉並の北西に位置する善福寺というまちである。まちの中心には池がある。池とその周囲は都市公園になっている。

多くの地元住民と同じく、私はこどもの頃から、この池の畔で多くの時間を過ごしてきた。多摩丘陵が集めた水が地下に潜り、武蔵野台地に降り注いだ雨と一緒になって、関東平野の扇端のところで、地上に湧き出した善福寺池。（図1・図2）大人になり、その音風景の豊かさに気づいてからは、「水に選ばれた場所」の畔に暮らす幸福と、この池を公園にして私たちに残してくれた先人たちへ深い感謝の念を抱くようになった。

そんな気持ちを地域の人々と分かち合うため、私は今、地元をはじめとする多くの人々との連携・協力のもと、〈池の畔の遊歩音楽会〉というプロジェクトを企画実施している。普段はあまり気づくことのない音環境資源の存在と共に、目には見えないこの「土地の記憶を発掘・継承・発信」することが、このプロジェクトのめざすところである。

ここでは、その背景にある考え方、それを踏まえたデザイン活動の事例を解説すると共に、私の人生と日々の暮らしを振り返り、〈池の畔の遊歩音楽会〉とそこに至るまでのいくつかの活動を紹介・解説したい。

2．サウンドスケープという用語とその考え方

私の専門は「サウンドスケープ soundscape」である。これは「ランドスケープ landscape」からの造語で、1960年代の北アメリカの「環境運動・環境思想」を背景に、カナダの作曲家にして環境思想家のマリー・シェーファー R.Murray Schafer（1933年―）が考案・提唱したものである。

「今日すべての音は、音楽の包括的な領域内にあって、とぎれのない可能性の場を形成している。新しいオーケストラ、鳴り響く森羅万象に耳を開け！　音を出すすべての人、すべてのものが音楽家なのだ！」（＊1）…これは、シェーファーがその主著『世界の調律』（原著 *The Tuning of the World* の出版は1977年）のなかで綴った文章である。

「サウンドスケープ」は、一般に「音の風景」と訳されるが、専門的には「個人、あるいは特定の社会がどのように知覚し、理解しているかに強調点の置かれた音の

図1：善福寺上池

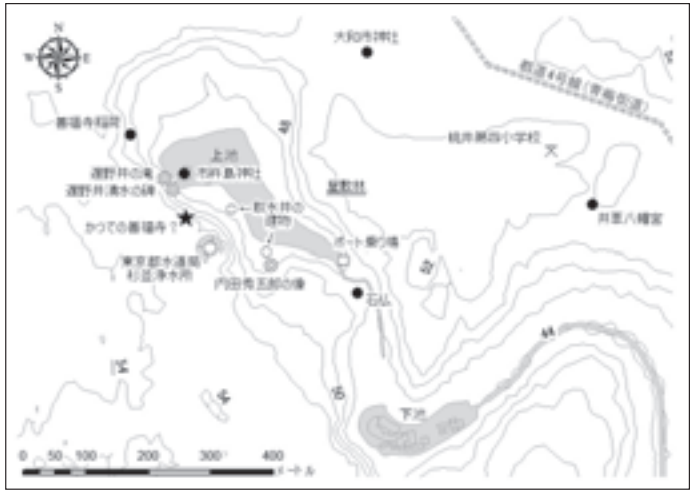

図2：善福寺池周辺の等高線と施設等の配置
（標高・水域データについては国土地理院 基盤地図情報、道路データについては国土交通 省国土数値情報よりダウンロードして作成／地図作成作業協力：森岡渉）
＊9の文献より転載

環境」と定義されている（＊2）。その構成音は、音楽や言語も含む「人為・人工の音」から潮騒や風の音、虫や鳥、動物等の生物の音などの「自然の音」や、静けさや賑わいといった音環境の特定の状態、さらには「記憶の音」や「伝承の音」（特定の地域で生活を営む人々の主体性や文化的理解を色濃く反映する音）までをも含む。

サウンドスケープの考え方は、西洋近代の「視覚中心社会」に対して、聴くことの重要性を問い直すとともに、音の世界から身近な環境を捉え直し、最終的には「ソーシャル・デザイン」をはじめとする、各種デザイン活動（それを総称して「サウンドスケープ・デザイン」と呼ぶ）に生かしていこうとするものである。

五感によって分断しがちな風景を全身感覚に繋げ、形に留まることのない「見えない環境」を扱うサウンドスケープは、特定の土地の記憶を辿りながら「現在の風景」を未来に繋ぐ働きもする。音の世界を切り口としながらも、ランドスケープの全身感覚性、また特定の場所やその土地の歴史との分かち難い関係性を喚起しようとするという意味で「まちづくり」においても重要な役割を果たす思想であり、考え方である。（＊3）。

3．瀧廉太郎記念館とサウンドスケープ・デザイン

善福寺の池の畔で、豊かな自然と文化の音に囲まれて育ったことは、私にとって自分自身の興味関心が、大学時代に専攻した「音楽学」から「サウンドスケープ研究」へ拡がった原因のひとつであるに違いない…　そんな想いを抱くようになったきっかけは、１９９２年４月に開館した「瀧廉太郎記念館」（大分県竹田市）でその庭園設計を担当したことだった。

１９８０年代の後半から、私はサウンドスケープの考え方を踏まえた各種の環境デザインの仕事に携わっていた。そうしたなか、記念館の全体計画を監修していた建築家の故木島安史氏より、次のような説明と依頼を受けた。…竹田の城下町の一角に、岡藩藩主中川家の家臣だった岩瀬家の屋敷がある。現在は一般住宅として使われているその建物と敷地を、竹田市が買い取り「廉太郎記念館」を開設するに当り、家屋は瀧家が住んでいた明治20年代の状態に復元するが、庭についてはその手法は使えない。記念館の主人が、我が国西洋近代音楽揺籃期における最初の本格的な作曲家のひとりなので、庭園デザインにおいて音環境の面で何か特別な工夫をして欲しい。

〈花〉や〈荒城の月〉などの作曲者として広く知られる廉太郎。こども時代にはどのような家や庭の音風景のなかで暮らしていたのかということに、私は大いに興味をそそられた。そのため、来館者が「少年廉太郎が暮らしのなかで体験していた音風景」を追体験するための庭づくりを基本コンセプトとし、その作業をサウンドスケープ・デザインの手法で展開することにした。

私は先ず、「廉太郎が聞いた竹田の音風景」をテーマに、旧宅およびその周辺地域をフィールドにした「観察調査」「聞き取り調査」「文献調査」を行った。そして、廉太郎が当時の家や庭で聞いていたであろう多種多様な音のなかから、いくつかの項目を選び、それらを復元もしくは新たな形で再現するための手法を検討しながら「音風景からの庭づくり」をまとめた（＊4）。

サウンドスケープ・デザインとは、単なる「音のデザイン」ではない。特定の地域に現に存在する、あるいはかつて存在した音の社会的・歴史的・文化的背景を調査分析（つまり「サウンドスケープ調査とその研究」）を行い、その結果を家づくり、庭づくりまちづくり等のデザイン活動に生かそうとするものなのである。

4．故郷の音風景との再会

廉太郎記念館がオープンした頃から、音の風景をキーワードに故郷の環境文化資源を発掘・発信することを目的としたさまざまなプロジェクトが、全国各地で企画・実施されるようになった。環境庁（当時）は、それらの動きをまとめる形で〈残したい日本の音風景１００選〉事業を展開し、１９９６年にその結果を発表した（＊5）。その後も「音風景」を手がかりとした環境資源の発掘・保全のためのプロジェクトは、日本各地でさまざまな形で提案・実施された。私自身もそのいくつかに関わり、推薦された数多くの音風景の現場を訪ね、それらの調査を行うようになった（＊6）。

そうしたなか私は、自分自身が暮らすまちでは、音風景について人々と話し合い、まちづくり等のデザイン活動に関わる機会の無いこと寂しく思うようにもなった。そこで、せめて（自分自身が、廉太郎記念館で試みたように）こどもの頃に体験した音風景を追体験できるような家に住んでみたいと考えた。その結果、祖母の借家での習作を経て、現在の自邸（風聴亭／屋敷林に代表される地域の風土を聴くための家）の基本構想と設計・施工に至り、２０００年からそこに住まうようになった。

その後、私は先ず、地元のミニFMラジオ局「善北こどもネットワーク」（通称「ラジオぱちぱち」）への参加、次に、善福寺池とその周辺地域を拠点に開催される「トロールの森」への参加プロジェクト〈池の畔の遊歩音楽会〉の企画と実施、さらには同まち歩きプロジェクト〈西荻→善福寺池フットパス〉、等、地元での各種活動のなかで、故郷の音風景と自分自身との関係とを繋ぎ直すようになった。

「ラジオぱちぱち」は2001年、善福寺北児童館の学童クラブで知り合った親子たちが結成したグループで、同児童館の特設スタジオから毎月第2土曜日、午前10時から2時間の放送を基本にさまざまな活動を展開している（図3）（＊7）。小学校時代の友人から「専門がサウンドスケープならラジオにも興味があるだろう」と誘われた私は、2003年にそのメンバーとなり「教えてその音！」という番組をもつようになった。

一方「トロールの森」は、2002年に始まった善福寺公園（上池）を会場とする野外アート展である。2009年には、それまでの「野外展示」に、音楽や踊り等の「身体表現／パフォーマンス」部門が、また翌年には、西荻窪駅（JR中央線）と善福寺池を繋ぐエリアに位置するさまざまな施設を利用して開催される「まちなか企画」が

図3：ラジオぱちぱち周年記念放送（本橋泰蔵米店前）

図4：池の畔の遊歩音楽会2010での辻康介

加わり、今では善福寺のまちで毎年11月の20日間（文化の日から勤労感謝の日まで）開催される「アートによるまちづくりイベント／地域の文化祭」として定着している（＊8）。

私は当初、一住民として「観る側」にいたが、2010年〈池の畔の遊歩音楽会〉の企画実施を通じて「演じる側」となった。その背景には、善福寺池の風景をさらに深く味わいたい、そのためには池の畔を舞台とした音楽活動を始めよう、なぜなら音楽とは本質的に環境を聴く行為だから、そのようにして発掘した善福寺池の環境文化資源をここに暮らす人々と共有したい、〈トロールの森〉に参加できるのなら、それは故郷における私のまちづくり活動、私を含む地域コミュニティのサウンドスケープ・デザイン活動そのものになるだろう…という思いがあった。

5．〈池の畔の遊歩音楽会―音のすむ森に捧ぐ！〉

「遊歩音楽会」とは、歩きながら行う音楽会の総称。〈池の畔の遊歩音楽会〉は、私が故郷の池のために企画し、2010年の初演以降、毎年1回「トロールの森」開催期間中の特定の日に、善福寺池（上池）を約1時間かけて歩き（回遊）ながら実施するプロジェクトのタイトルである。

〈池の畔の遊歩音楽会〉は当初、音風景案内人（ナビゲーター役の私）による「語り／解説」と、吟遊詩人（歌手の辻康介氏／図4）による「うた（歌・謡・吟）」、両者の掛け合いを基本のスタイルとするものだった。池の周囲で予め選んだいくつかの地点で、その場所の来歴等について私が解説をし、辻さんが私の思いを歌にして吟じる。参加者はそれぞれの場所特有の気配を感じ、土地の記憶に思いを馳せる。

そのようにして生まれた歌は、音楽会の回を重ねるごとに少しづつ増え、池周囲の各地点に蓄積されていった（図5）。パーカッションやサックス奏者といった音楽家たち、さらに私の大学のゼミ生たちも参加するようになり「池の畔の遊歩音楽会チーム」ができあがっていった。当初設定した構成を基本としながらも、毎年チームの皆で、その年のプログラムと必要な歌（これまでの歌からどれを使うか、それとも新しい歌をつくるのか）、音具その他の道具についての検討するようになった。

基本コンセプトは終始、参加者が池の畔に存在するさまざまな音や気配の存在に気づき、その土地の記憶や歴史に思いを馳せること。音楽会冒頭の挨拶で、私が参加

者に「この音楽会を楽しむため心得」として伝授するのは次の三か条である。

一、音楽と池の音、この地域の音とのセッションを楽しむ。池も公園も、ライブで音楽を奏でている。

二、移動しながら、日差し等を含め、時間的に変化するその風景、景色の変化と音楽とのセッションを楽しむ。

三、音楽の力を通じて呼び覚まされた土地の記憶や歴史に想いを馳せる。

ここで思い出していただきたいのは「瀧廉太郎記念館の庭園デザイン」のため、私が「廉太郎の音風景」をテーマにサウンドスケープ調査を行ったこと。つまり〈池の畔の遊歩音楽会〉を契機として、私は故郷の池とその周辺地域をフィールドにしたサウンドスケープ調査研究を始めることになり、その作業は現在も継続中である(＊9)。

図5：池の畔の遊歩音楽会2017フライヤー（部分）

6．故郷の音風景の歴史と今

故郷の音風景の「歴史」について分かったこと・考えたことを、箇条書きしてまとめると次のようになる。

・武蔵野台地における貴重な水と緑の拠点。社会・文化的にも重要な意味をもつ武蔵野三大湧水池のひとつが善福寺池である。豊かな水音がこの土地の「基調音」だった。

・池の畔には旧石器―縄文時代以来、一貫して集落が形成されてきた。寒冷な気候のなかでは、黒曜石等の石材から石器を作成する音が響いていたと思われる。温暖な気候となってからは、現代にも通じる里山的な音風景が広がっていたはずである。

・池は水の物理的な供給地に留まらず、人々を救う「聖なる空間」として地域の暮らしを支えた歴史が織り込まれた「トポス」を形成している。中ノ島には水の女神を祀る市杵島神社があり、太鼓を叩いて「ホーホィ、ナンボエ～」と唱えながら歩く雨乞いの行事が行われていた。

・池の旧名は「遅野井」で、その名に関しては「頼朝の遅野井伝説」がある。池近くに位置する井草八幡宮の旧名もまた「遅野井八幡」。そこでは古くから、祈祷の声、祭りの音が「土地固有の音」だった。

・善福寺という池の名称は、かつて池の畔にあった寺の名に由来するが、その寺院の記録や痕跡は全く残されていない「謎の寺」である。

・池のある現在の杉並区最北部は、中世から近世まで「井草」と呼ばれていた。池周辺の低湿地には沢山の藺草（いぐさ）が生えていたため、あるいはそれらの「池の草」（イケのクサ→「イグサ」である葦（アシヤヨシ）が茂っていたため等の説がある。それら水生植物が、風に吹かれる音も、この土地の「基調音」だった。

・明治40年に井荻村の村長となった内田秀五郎は、池を中核とする地域を「風致地区」とし、地主たちを説得して池とその周囲の土地を東京都に寄付して公園とした。地主たちは風致協会のメンバーとなり、池と公園の整備事業を展開し、池には彼らの作業音が響いていた。

・現在「遅野井の滝」のある地点には、湧水量の一番多いカマ（泉を意味する地元の言葉）があり、水が音を立てて湧いていた。しかし、昭和5年に深井戸が掘られてからは、ここから水が地上に湧き出ることはなくなった。

現在の滝はレプリカで、地下水をモーターで汲み上げ流している。

・明治時代まで、この地域には大きな太鼓が無く、人々は府中の大国魂神社の暗闇祭りで太鼓を叩くのを楽しみにしていた。大正時代になってようやく大太鼓をつくり、昭和54年に「御太鼓講」を結成。その2年後から「太鼓祭り」が始まり、以来毎年5月3日に井草八幡宮の氏子区域で太鼓による巡行を行っている。

音風景の「今」を把握しようとしたとき、その調査手法には多様なものがある。ここでは、音の空間的配置や可聴範囲を表すサウンドプロフィールマップ（図6）を紹介しておく（＊10）。

7．おわりに

〈池の畔の遊歩音楽会〉は、一昨年、これまでの「音楽」あるいは「ハイアート」から「芸能」への越境を試みた。先行する七年間の活動成果を踏まえて、イベントそのものに土地のもつ「気・パワー」との交流という祭祀的色合いを強めたいと考えたからである。そこには、その年のトロールの森の全体テーマが「境界／BORDER」だったというきっかけはあったものの、私たちチームには以前から、自分たちがやりたいことは「西洋近代の芸術音楽」という枠組みには入らないという確信があった。

図6：善福寺池と井草八幡神宮をフィールドにした各種サウンドマップ

「個人の表現」であるアートに対して、〈池の畔の遊歩音楽会〉をある種の「共同体の表現」にしていきたい。その活動を通じて、音の世界から地域の歴史・土地の風土に想いを馳せる感性をもった社会を育みたい。

まちづくりにおけるアートの役割、芸能の役割、そこから見えてくる現代社会の課題について、想いを巡らせる日々が続いている。

【註釈】

＊1　R・M・シェーファー（1986）『世界の調律』平凡社、24頁。

＊2　Truax, Barry ed. (1978) *A Handbook for Acoustic Ecology*. A.R.C. Publication, p.126.

＊3　鳥越けい子（1997）『サウンドスケープ：その思想と実践』鹿島出版会（SD選書）。

＊4　鳥越けい子編（2012）『廉太郎と竹田の音風景』大分県竹田市商工観光課。

＊5　鳥越けい子（2002）「残したい日本の音風景をめぐって」『エコソフィア』№9、33–41頁。

＊6　鳥越けい子（2008）『サウンドスケープの詩学』春秋社。

＊7　https://radio88.exblog.jp

＊8　http://www.trollsinthepark.com

＊9　鳥越けい子（2015）「音風景史試論：遅野井（善福寺池）を中心として」陣内秀信・高村雅彦編『水都学Ⅲ』法政大学出版局、243–262頁。

＊10　鳥越けい子（2018）「善福寺池サウンドスケープ・プロジェクト：2017年の活動」『法政大学エコ地域研究センター2017年度報告書』、38–43頁。

街の“仮説性”

林 匡宏
MASAHIRO HAYASHI

ふと辺りを見回すと、街のあちこちに「仮設」空間が存在する。例えば工事現場の仮囲い、建築物が竣工するまでの間、歩道脇に仮設の白い壁が立ち上がる。期間限定バーゲン広告、イベント会期中ののぼり旗やテント、これも一時的な賑わいや街の非日常性を演出するための仮設の風景と言える。また、入居者募集中の一時的な空き家や空き店舗も…。私はこれらの風景を、街が次のステージへと進むためのチャンスと捉える。仮設であるため、ある意味やり直しがきく。高度経済成長期のように次々に大きな風景を作り出す時代ではなくなっている昨今、確かな効果を生み出すための仮設的な検証を小さく、素早く実施することで、思い切りよくチャレンジが出来、その中で最適解を探ることが出来るのではないだろうか。つまり、ただ漠然と街を更新するのではなく、将来的に街の価値を高める「仮説」が前提にあり、それを検証するためのアクティブな実験こそが街の「仮説」空間として次々と生まれては消える、そんな攻めの街づくりを実践すべく、私は官民の頼もしい同志に支えられながら北の街でいくつかのチャレンジと失敗を繰り返している。

1．取組の背景／増え続ける街の「隙間」

私が活動する札幌やその近郊都市では近年、街の「仮説」を検証できそうな「隙間」が次々と生まれている。例えば、交通量の減少に伴う車線数の余剰、再開発事業の工事着手前の塩漬け敷地や仮囲い空間、開発後に生まれる公開空地、全国的に有効活用の機運が高まる河川空間、或いは依然増加し続ける空き家・空き店舗など。これらは何等か事情により一時的に低未利用な状態にある敷地であるが、ここにチャンスを見出し、然るべき体制で首を突っ込めるかどうかが私のチャレンジのスタートとなる。これには、道路や公園、河川などの公共空間や公開空地で民間活力を導入するための法改正や緩和制度新設の動向も少なからず影響しているが、特に札幌近郊でこのような場に参画するためには、エリアマネジメント組織との協働が不可欠である。エリアマネジメント組織とは、特定のエリアを単位に民間が主体となってまちづくりや地域経営を積極的に行う団体であるが、札幌には地域別にこのような組織体が複数存在する。私はいつも忙しい彼らのお手伝いを自ら申し出ることで、街づくりの最前線に首を突っ込むチャンスを頂く。

2．取組の内容

■多岐に渡る「仮説」プロジェクト

私の取組は道路や河川などの公共空間で行うものと、民間敷地内で行う2つに大別される。河川空間の魅力の普及啓発事業である「ミズベリング」や道路上に人工芝を敷き詰める「スポーツマンリビング」などは前者であり、民間敷地内の広場や空き家、空き店舗を活用した「あけぼのテラス」「丘の上の休日」「条丁目十貨店」「ゲストハウス」は後者である。「コバルドオリ」や「狸小路No Maps化」「上町商店街」は道路と沿道敷地を一体的に設える事業で双方の特性を兼ね備える。領域が多岐に渡る複数のプロジェクトを同時期に進めていると、自身の高揚感や達成感がプロジェクトにより異なることが分かる（図1）。高揚感とは、私がその取組を通してどの程度テンションが上がったか、という極めて主観的な評価指標であるが、これこそが私の考える「街の仮説空間像」であり、それには次の要素が含まれる。取組が「最新の地域ニーズに応える、若しくは発掘するものであるか」「単純なイベントに留まらず将来的に持続する仕組みは構築できそうか」「関係者の意識を共有するきっかけとなったか」「見た目かっこよかったか」など、とにかく地域の価値向上に資する実験であったかどうかが何より重要と考えている。

■街の共的空間「commons」を増やす

図1では、各取組を公共空間と民間敷地内に分けて整理したが、いくつかの取組は両者の境界に位置している。これは道路とその沿道を一体的なフィールドとして魅力化に取り組んだ事例であり、例えば「狸小路5丁目NoMaps化」では路上でジャズコンサートを行い、沿道の居酒屋はお笑いステージに、駐輪場は無料映画館として、商店街全体をエンターテイメント空間とした。また「上

町商店街」では空き店舗を一時的に活用して駄菓子屋をオープンさせ、その軒先（路上）に人工芝を敷き子どもの遊び場とした。これらでチャレンジしていることは、道路と沿道の境界部に人々が自由かつ快適に時間を過ごすことのできる、パブリックでもプライベートでもない中間領域を創ることである。私はそれを「共的空間 commons」と呼んでいる（図2）。私はこのような空間が街中にどんどん増殖していけば良いと考えており、そのモデルとして注力している取組が「コバルドオリ」である。

札幌都心部の街は碁盤の目状に街区が形成されており、道路は太い本通と路地的な仲通で構成される。建物の顔は本通に面して並び、街の賑わいを形成している。一方で仲通は、駐車場出入口や建物の裏側が面することから、そのヒューマンスケールな空間を活かし切れずほとんど人の歩かない道となっている。このような現状を打開しようと、地元のエリアマネジメント組織（札幌駅前通まちづくり株式会社）とともにスタートした仲通魅力化プロジェクトが「コバルドオリ」である。再開発予定地において3年間という暫定利用でいかに新たな価値を生み出すか。周辺のオフィスワーカー（女性）をターゲットとしたテナントリーシングや、高頻度で更新するチャレンジショップ、店舗間を横断したコラボメニューの開発など「やってみる」に溢れた企画だ（写真1）。現在は道路の車両通行を一時的に止めて行うアートプロジェクトを企画中である。手あたり次第にチャレンジを繰り返す背景には、やはり「commons」創出という狙いがある。「commons」は街のチャレンジの受け皿でもある。利用者が快適に過ごすだけでなくスモールビジネスを育む場所であり、これにより都市の活力とにぎわいを強化するとともに、札幌の日常を少し豊かにすることを目標としている。冬の寒さが厳しく、地下部に賑わいを奪われがちな札幌都心において、「commons」は歩行者を地上部に誘導し、都市に立体的な人の流れと奥行を創る。更にこの「コバルドオリ」で特筆すべきは暫定利用特有の空間の可変性である。沿道に建てられた建築物は簡易な構造ではあるが建築確認申請が必要となる。仮設建築物の確認申請は1年間が有効期限であるため、この建築群は1年おきに「模様替え」する。基礎はなく地盤面にただ置いてあるため、水道やガスなどインフラを建物から切り離し、クレーンで移動させる。前後の準備を含めて1か月弱あるこの期間は、工事と捉えてしまえば収益性の低い事業的リスクとなるが、一転アートイベントとして

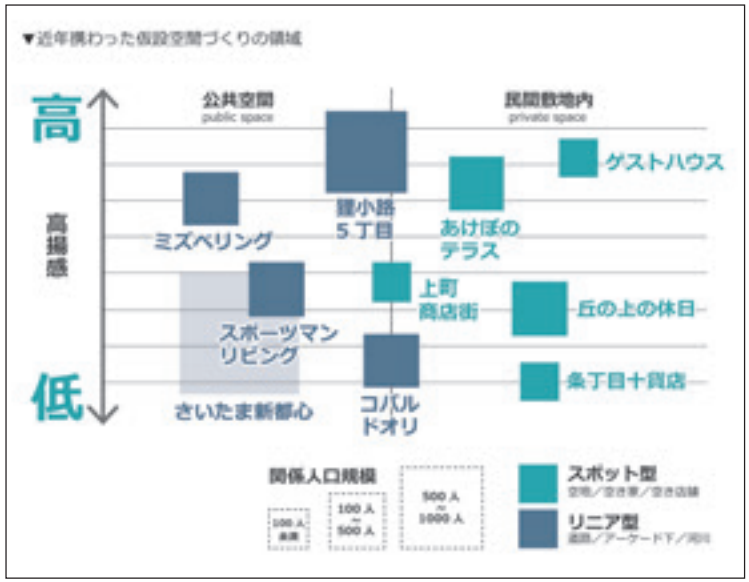

図1：「仮説」プロジェクトの領域と筆者自身の高揚感の関係

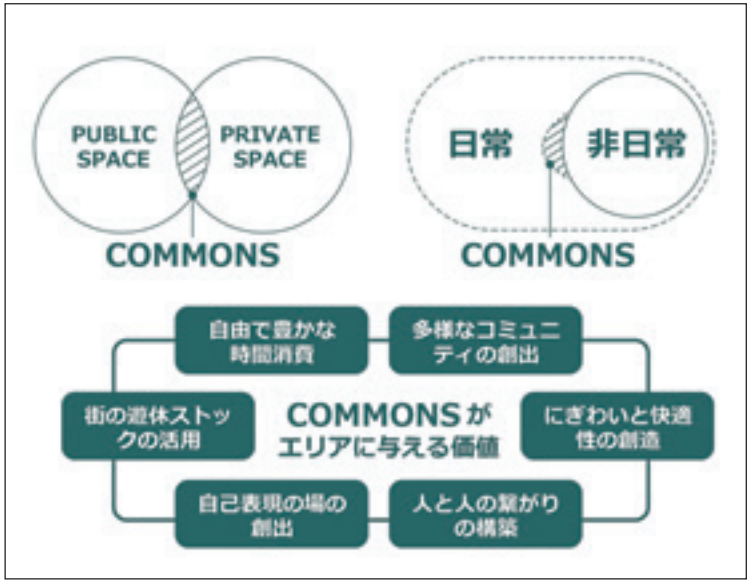

図2：共的空間「commons」とは

設えてしまえばチャンスとなり得る。このようにハードが固定しない更新性も「仮説空間」の魅力と言えよう。以上のように、小さく、素早く、実験を繰り返す「街のcommons」の価値は、単純に空間を生み出すだけでなく、その仕組みやプロセスが重要と考える。これについては、「5．手法と体制」で詳述する。

■言ってみるもんだ

「仮説プロジェクト」を進める上で重要なことは、街に新たな価値を生み出す仕掛けを、関係者と意識共有しながらチャレンジするということである。そこには往々にして「今までやったことのない」壁がある。公共性の高いプロジェクトほど「前例のない事態」には相応の説明が必要であり、然るべき組織との連携や許認可などのプロセスが必要となる。「狸小路5丁目 No Maps 化」はその最たる例で、道路空間であるアーケード下を活用するための各種関係部局との協議や交通管理者（警察）の許可申請には多くの時間を要した。都市機能としての道路の本来の用途は人や車の通行であることから、これと逸脱した使い方をするにはその理由が必要である。しかし私はどうしても路上をリビング化してみたかった。それは

写真1：仲通と沿道の魅力化プロジェクト「コバルドオリ」

商店街の意思でもあった。まず計画段階で私はリビング化に必要なことは「商店街のスリム化」だと考えた。従来の商店街はものに溢れており（それは賑わいや収益性を高めるための商業地としてごく自然な現象なのだが）、人がゆったりと滞留するには少し要素が多すぎると判断した。そこで商店街の「色」と「光」の数を少なく（スリム化）することで通常とは違った空間づくりにチャレンジした。「色」については延長100mの商店街の路上にブラックカーペットを敷き、その上に置く什器（椅子・テーブル・プランター）は全て木調に統一した。「光」については、商店街を煌々と照らすいくつもの照明器具のうち、オレンジ色の電球を除き全て消灯した。ここまでの行為は商店街の歴史上前例がなく、協議にも相当の時間を要すると意を決して事務局長に打診したところ、二つ返事で「いいよ」…と。

また、札幌近郊の元トップアスリート約200名で構成する「北海道アスリートの会」で主催した「スポーツマンリビング」は、札幌の目抜き通りである札幌駅前通に1000㎡の芝生を敷く大胆な計画であったが、予算のない我が組織にはこの芝生を入手する術がなかった。しかし、（詳細の入手ルートの言及は控えるが）某組織に打診したところ「いいよ」となんと無償提供してくれた。このように、ただやりたい、だけではなくそこでその行為を行う意図や意義が共有できれば、突破口は意外と近くに現れたりする。これも「仮説」のなせる技なのかもしれない。もちろん、紹介したような理解あるパートナーがいたからこその結果なのだと、関係者の方には敬意を表している。「言ってみるもんだ。」

■同志との連携、モバイルハウス

今年度のいくつかの「仮説プロジェクト」の鍵を握ったのが「モバイルハウス」である。これは北海道仁木町発のプロジェクトであり、普通自動車で牽引可能な車輪のついたコンテナである。ある時はカフェ、またある時はホテル、冬の厳しい北海道で季節ごとに場所と用途を変えながら地域に価値をもたらすビジネスモデルとして私の同志が取り組んでいる。今年度は次の二つの事業でこのモバイルハウスとの連携を試みた。一つは「ミズベリング江別」。「ミズベリング」とは、国土交通省が提唱する河川空間の魅力の普及啓発事業であり全国で約50か所の河川で様々な団体が活動する。私は3年前に「ミズベリング江別」を立ち上げ、以来開発局江別河川事務所の全面協力のもと、千歳川の魅力アップに取り組んでい

写真２：「ミズベリング江別」河川空間の一時占用によりコンテナカフェを設置

る。今年はそこにモバイルハウスを置き、カフェ、本屋さん、ピザ屋さんを展開。心地よいウクレレの音色の中で変わりゆく江別の街の将来について、官民の元気な皆さんとともに想像力を膨らませた（写真２）。

もう一つは札幌市南区に立地する団地内で開催した「あけぼのテラス」。これは団地内コミュニティの活性化を目的として集会所と広場を「仮説空間」とした事例である。ワンコインでヘアカットやネイルケアのできる「出張美容院」や、近隣大学と連携したカフェは高齢者の方に特に人気が高く、今後継続してコンテナを運営したいという住民グループも現れた。

■おばあちゃんに突撃、からの…。

同じく札幌市南区にある丘の上の住宅街を歩いていると、少し奇妙な空き家を見つけた。建物は大豪邸で状態も良い、しかし人が住んでいる気配はない。一方で庭は街区公園並みに広く木々は美しく剪定されている。この街は少子高齢化が激しく、街に活気がないとの話があり、メンバーを編成し現地に赴いた時のことだった。この敷地で何かできればエリア再生のきっかけになる、と考え早速企画を拵え、所有者を調べ、訪問した。所有者は90歳のおばあちゃん、自分は近くに住んでいるがその豪邸には誰も住まなくなってしまい、売却に向けて管理は続けていたと言う。我々の提案を全てうん、うん、を聞き入れてくれた。隣で付き添いの孫娘が「おばあちゃんはほとんど耳が聞こえないの。」と補足する。この後の具体的な話は孫娘の方と共に進めることになったが、実はこの方が只者ではなかった。自身が所有する別の不動産

でアーティストのためのシェアアトリエを運営していたり、月に一度のアートイベントを企画していたり。偶然の出会いもまた「仮説プロジェクト」の魅力であり、当然アートイベントと共催することにとなった。イベントは広大なお庭を活用したクラフト系のマルシェとなり、多くの方に来場頂いた。

3．仮説空間のデザイン

■成功した様子を先に祝おう

「仮説プロジェクト」のスタートでは、決して言葉や文字だけで議論しないようにしている。想像力溢れるアイデアはその場でスケッチに起こし、そこからもうワンステップ議論を行い、案をブラッシュアップさせる。すなわち、その「仮説プロジェクト」が実現して人々が楽しみ街に価値が生まれ大成功している姿を、企画の時点で勝手に皆で想像して楽しんでしまうのである。これにより、そのプロジェクトに何となくプラスのエネルギーが働く、ような気がしている。案がまとまれば今度は外部から共感を得るためのイラストに描き下ろす。このフローを繰り返し行うことで、「仮説プロジェクト」は徐々に形づくられる（写真３）。

写真３：関係者のチャレンジ精神をその場で絵にする「ライブドローイング」

■「余白」を残す

しかしながら、「仮説プロジェクト」の空間デザインは個人的に確立できていないというのが正直なところ。なぜなら各プロジェクトで解決すべき地域課題や可能性、立地、推進体制、予算規模などは様々であるため正解が

ない。ただ、心掛けていることは「作り込み過ぎない」という事である。前述の「あけぼのテラス」では約１００個の木箱を住民とともに製作した。この木箱は椅子にも使え、積み重ねれば机にもなる。主催者側は芝生の上にこの椅子をランダムに配置するだけで、イベント中に利用者の手で自由にカスタマイズされていた。ある瞬間では図書室のように使われ、またある時は居酒屋（スナック）のような雰囲気も醸し出していた…。このように主催者側のイメージを一方的に押し付けるのではなく、利用者の積極的かつ自由な意思を反映させる「余白」を残すことで、多様な属性の人達が使いやすく快適で、満足度の高い空間になるのではないかと考えている。

■ご購入は計画的に…。

計画・準備段階を極めてコンパクトにすることが「仮説プロジェクト」の特長であるが、それでも今年度の反省は、勢いに任せた計画性のなさであった。約３００㎡のカーペットや約１００個の木箱、出来たはいいがどこに置く…？これらの保管は現在も仮置き状態である。今後の活用も見据えた企画であったが、その保管先の考えが甘かった。少し企画に携わった「さいたま新都心パブリックライフフェス」は駅前のデッキ空間で街の新たな日常を創り出す企画であったが、クラウドファンディングで資金を調達し、その資金で屋台を製作し、イベント後は出資者に贈呈する、という仕組みをとった。感度の鋭い共感者を全国から募集するだけでなく、製作したツールの保管先まで確保できる、優れた手法だ。

■手法と体制／小さく、素早く、元気よく

「仮説プロジェクト」の最適な体制や進め方はケースバイケースであるが、特にパブリックスペースの活用などは、個人が思い付きで実施できることではない。行政や地域、場合によっては大学との連携が必要不可欠であり、札幌ではエリアマネジメント組織の存在が大きい。札幌には都心部に３つもの「まちづくり会社」が存在する。地元商店街の出資で生まれたものもあれば広告収入を原資として運営している会社など様々であるが、このような組織と連携することで、はじめて「仮説」の検証が可能となる。

そこで私が提唱したいのが「小さく・素早く・元気よく」チャレンジを実践することのできる組織体である。組織が大きくなると関係者が増え合意形成にも労力と時

図３：街の仮説空間を企画、運営する小さなマネジメントチーム「コモラボ」の仕組み

間を要するが、エリマネ組織と連携することでアイデアをコンパクトに実施まで繋ぐことができる。私はこれを「コモラボ」と呼ぶ（図３）。「コモラボ」は全体をとりまとめる「コミュニティビルダー」を中心に、関係各所との合意形成を助ける「エリマネ組織」、制度や手続き面を円滑に推進する「行政担当課」、実際にクリエイティブな感性で場を企画・運営する「プレイヤー」で構成されるが、その人数を10人未満とすることが重要と考える。少人数とすることで各人の役割を明確にするとともに、一回の打ち合わせの質を上げる。現在は先に紹介した「コバルドオリ」にてこの体制を試行しているが、仲通に限らず、暫定空間や低未利用地など、今後どんどん増える街中の「隙間」を持続的に魅力化する実行組織として、今後浸透していけばと考えている。

4．仮設から常設へ／仮説から実証へ

街の「仮説」は地域課題を解決し街が将来へと向かう手段であり、目的ではない。一定期間の実験が終われば次はいかにそれを街に定着させるか、という議論へと進む。それが自治体レベルの施策や街区レベルの都市開発に組み込まれるのか、手法は様々と考えるが、私はそれ

を小さな不動産レベルでチャレンジしている。

■ニーズとマーケットを探る

私は札幌市近郊の江別市にてNPO法人を立ち上げ、遊休不動産（古民家）を活用した「仮説空間」として「条丁目十貨店」を期間限定でオープンさせた。内容は小さな野菜直売所、本や雑貨のマルシェ、クラフトギャラリーなど「大人のチャレンジショップ」という意味合いで、使途を固定せずに地域ニーズを探った。結果、「本」は多少なり継続してほしいとのリクエストがあったが、それよりも発掘されたのは「みんなでいれる場所が欲しい」「交流したい」というニーズであった。

■ビジョン共有、仲間を集める

すると、街の核となる交流スペースを創ろう、という発想になるが、「仮説」を常設化するためには事業をマネタイズさせる必要がある。そこで「ゲストハウス」という収益床を併設することで事業成立を目指すことになった。次に共感者を集めるための「ビジョン」をとりまとめ各所で発信の機会を頂いた。その中でゲストハウスに関する公開勉強会たるものも立ち上げ、「リアルクラウドファンディング」とでも言うべきか、共感頂けそうな方には様々な形で支援を頂いた。

■物件を探す、根回しをする

物件探しは困難を極めた。1年以上を費やし、ようやく巡り合えた物件は商店街に立地する古い呉服店であった。空間のポテンシャルはあるように感じたが不特定多数の人間か今後使用することになると設備の老朽化や許認可関係のハードルが高い。しかし様々な縁を感じる物件であったためにその物件に決めた。また、街に見知らぬ人が流れ込むこの業態は賛否が分かれるとよく耳にするが、江別の街も例外ではなかった。そのため商店街振興組合のご協力のもと商店街主催の勉強会で話題提供させてもらうなど、「小さく、素早く」実験を行ってきた「仮説」の期間とは打って変わり、これにも1年以上の時間をかけて入念な合意形成を行った。もちろんこのプロセスの過程で、その街の地域課題に合わせて適宜事業内容をカスタマイズし、ようやく事業内容が固まってきた。その中で旧呉服店で営まれていたクリーニング業を事業承継することで、地域コミュニティへの参入をより円滑に実現することができた。

■ビジョンの再共有、組織化

次に、固まった事業計画をまた「ビジョン」としてとりまとめ、今度はそれを定款として整理し、運営組織を法人化した。これにもまた様々なエピソードが生まれたが、ここで紹介するにはややディープな内容である。ここまで話が具体化すると運営サイドの覚悟も決まってくるが、周囲の反応にも変化が見られた。これまでは興味本位で応援してくれていた共感者から、具体的な数字を含む事業連携の相談があったり、エリア価値向上に向けてより現実的かつ展開力のあるディスカッションが生まれるようになった。

■ゲストハウス開業へ

以上のように諸々の準備が整い、江別の小さな「仮説プロジェクト」は、その姿を変え、共感者を得ながら新たな地域拠点として生まれ変わることになる。開業後も様々な課題があるかと思うが、これまでのプロセスが、「仮説」から常設へと、遊休不動産を活用しながら新たな価値を生み出すモデルとして確立できればと考えている。この間に私には3人の子どもが生まれ、一方で安定したサラリーマン生活に終止符を打ち、リスクだらけのフリーランスの道を歩み始めたのであった。そう、私と家族の人生もまた形の定まらない「仮説」なのである。

5．終わりに

「街の仮説性」は街が次の姿に生まれ変わる過渡期に現れる重要な性質である。地域形成における「仮説空間」の意義は、①素早いチャレンジ、②低未利用空間の活用による魅力向上、③効果の体感、④常設化に向けた気運の醸成、であると考える。繰り返しとなるが、「仮説空間」とは街の課題解決に資する、あるいはエリア価値向上に資する「仮説」であり単なるイベントではない。仕組みづくりのチャレンジである。そこで「仮設空間」でその魅力をいち早く当事者に体感してもらうことで、会議室では生まれないクリエイティブかつ具体的な議論や意見交換ができる。私は、関係者の目がキラキラと輝くこの瞬間がたまらなく好きである。これも「仮説空間」をつくる醍醐味と言えるだろう。

地方都市魚津における駅周辺のまちづくり
―新・旧市街地の岐路―

阿久井 康平
KOHEI AKUI

1. はじめに

「駅は都市の顔・玄関口」といった言葉をよく耳にするのではないか。本稿では、地方都市魚津にフォーカスを当て、とりわけ駅周辺で現在進められているまちづくりやその取り組みについて触れていきたい。

鉄道で高岡から約40分（富山から約25分）、風光明媚な山海、田園風景を眺めながら魚津のまちに辿り着く。魚津市は、富山県東部の新川地方に位置する人口約４万２千人の中核都市である。市内には、あいの風富山鉄道の魚津駅をはじめ、富山地方鉄道の新魚津駅、電鉄魚津駅、西魚津駅、経田駅の５つの鉄道駅、北陸の重要幹線である北陸自動車道、国道８号などが走り、県内の主要都市と結ばれている。

魚津市の都市構造は、主に魚津駅・新魚津駅周辺において１９６０年代に開発された新市街地、そして魚津城跡を中心とした電鉄魚津駅周辺の旧市街地を中心に成立してきた背景がある。

現在、わが国の多くの都市、特に地方都市における人口減少問題が顕著となっているが、魚津市もまた同様の問題に直面している。図１のように、２０１０年（平成22年）から２０１８年（平成30年）にかけた人口増減率をみると、ほとんどの町丁目で人口減少が際立つ。特に、新・旧市街地の中枢を担う駅周辺において、人口減少が如実に表れていると言えよう。一方、高速道路や主要幹線道路付近においては、人口増加が見られる地域もみられ、依然とした自動車依存の高さも伺える。また、図２のように、魚津市の人口密度は、魚津駅・新魚津駅周辺の新市街地、電鉄魚津駅周辺の旧市街地で人口集中地区を形成していることが分かる。ひと、環境にやさしい都市づくりの必要性、都市財政の圧迫などといった背景のもと、「まち空間の創造と再生」を考える上で、駅周辺の地域構想は今後大きな役割を担うものとなるであろう。

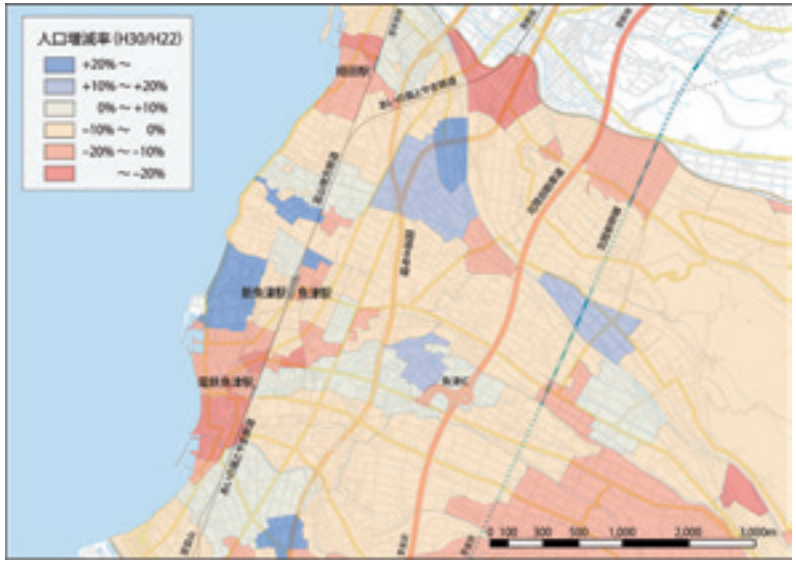

図１：魚津市中心市街地の人口増減率（2018年／2010年比）
（魚津市資料（＊１・２）をもとに筆者作成）

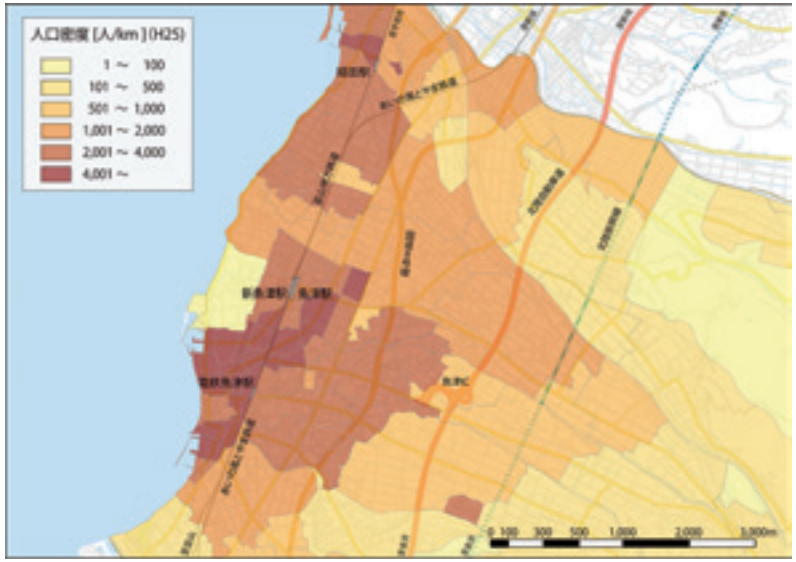

図２：魚津市中心市街地の人口密度（2010年）
（魚津市資料（＊３）をもとに筆者作成）

写真1：魚津駅から東側（山側）を望む（魚津市提供）

2．新市街地 魚津駅・新魚津駅周辺のまちづくり

魚津をはじめて訪れたとき、山をアイストップとしたヴィスタに圧倒された景観体験を思い出す。駅を降りてすぐ眼前に望む立山連峰は、富山市などから望む形象と違った景観を愉しむことができる（写真1）。対して、新魚津駅西側から海岸線までの距離は1㎞にも満たない。これほどまでに自然資源との関係がコンパクトな都市は全国でも類をみないものではないか。

新市街地の形成過程を顧みると、魚津駅前（釈迦堂地区）は、1955年（昭和30年）頃まで駅正面以外は周囲に水田が広がり、約30戸の兼業農家がある集落であった（＊4）という記録が確認できる。また、現在の魚津駅東側の街路は、1963年（昭和38年）4月から1970年（昭和45年）3月にかけて区画整理され（＊5・6）、さらに、魚津駅西側については、1981年（昭和56年）度から区画整理され、1995年（平成7年）11月に完了した（＊7）という記録が確認できる。

魚津駅と新魚津駅は、あいの風とやま鉄道と富山地方鉄道が並走し、相互乗り換えが可能である。これら2駅が旧JR貨物跡地を挟むような空間となっている。

この魚津駅・新魚津駅を核として、「公共交通の利便

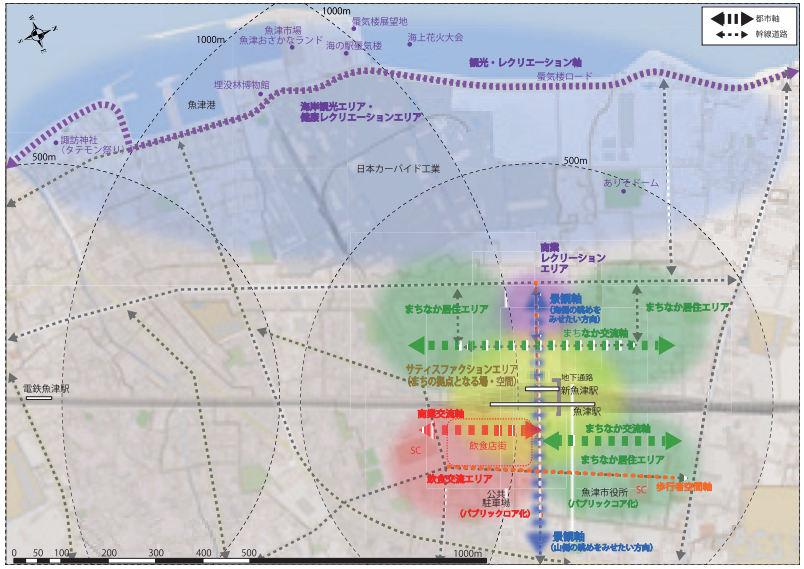

図3：魚津駅・新魚津駅周辺まちづくり協議会で提示された将来像の都市軸・ゾーニング（魚津市資料（＊8））

図4：魚津都市計画用途地域図（＊9）

性向上」「賑わいあるまちづくり」の両立を目的としたまちづくり構想の策定が進められている。このまちづくり構想にあたり、２０１７年（平成29年）８月から産官学での魚津駅・新魚津駅周辺まちづくり協議会（以下：協議会）が立ち上がり、地域から求められる期待も大きい。

これまでに協議会で導出された意見をまとめると、大きく３つに体系化できる。一つ目は、駅周辺空間の再編にあたって、気軽に鉄道横断が可能であり、駅東側（山側）と駅西側（海側）がつながった空間デザインを形成することで地域のアイデンティティが地域内外に向けて発信されるまち。二つ目は、駅から２５０ｍ徒歩圏域内では、一通りの生活機能を拡充し、自動車に依存しなくても歩いて暮らせるエリア、さらにこのエリアに訪れればいつでも誰でも交流が楽しめるまち。三つ目は、駅から広がるネットワークとして、市内各地と駅が自転車や小型・自動運転モビリティを含む様々な移動手段がシームレスに

写真２：埋没林博物館（魚津市観光協会HP（＊10））

写真３：たてもん祭り

写真４：しんきろうロード

つながり、駅周辺の利便性を市民が享受できる。また、海側の観光コンテンツとのアクセス改善により広域からの来訪の増加も促進させ、広域交通ネットワークとの連携を充実させるまちである。図３のように協議会では、これらの意見を踏まえて、将来像の素案策定を行っている。

図４の駅周辺の用途地域をみると、対象エリアの多くを占める商業地域をはじめ、住居（専用）地域であることが分かる。駅周辺まちづくりの構想に当たっては、これらの特性を踏まえるとともに、今後検討が必要となる居住誘導区域、都市機能誘導区域、誘導すべき都市施設などを勘案した立地適正化計画との連動を図りながら、戦略的に考究していくことが求められる。

ここでは、現在進められている魚津駅・新魚津駅周辺のまちづくり構想の都市軸、ゾーニングについて順を追ってみていきたい。

都市軸については、まず冒頭で述べた魚津の都市構造が形成する山側のヴィスタ、海側の地域資源といった固有のポテンシャルをつなぐ都市軸を景観軸として位置づけている。現状の駅空間に着目すると、まちの東側と西側は地下自由通路を利用することによって移動可能な一方で、空間的、視覚的にシームレスにつながっていると

は言い難い。つまり、言い換えれば駅空間そのものがまちの分断要因にもなっている。まちの連続性を確保しつつ、今後の将来像を描いていく上で、この景観軸が主導的な役割を担っていくものとして期待されている。

商業交流軸は、現状の飲食店街や観光案内所に加え、今後拡充すべき商業施設や機能をつなぎ、商業交流や賑わいの活性化を図る都市軸として位置づけている。例えば、商業交流軸と景観軸が交わるエリアでは、オープンテラスやオープンカフェなど、魚津特有の眺望や資源を利活用した商業展開の可能性も見出すことができるのではないか。

観光レクリエーション軸は、海岸沿いの「埋没林博物館（写真２）」「海の駅蜃気楼」「ありそドーム」「魚津市場おさかなランド」といった主要な観光施設、ユネスコ無形文化遺産・国重要無形民俗文化財・県有形民俗文化財指定の「たてもん祭り（写真３）」、「海上花火大会」、「しんきろうロード（写真４）」などの観光資源をネットワーク化した都市軸として位置づけている。海側の景観を見せたい方向、景観を感じられる景観軸から観光レクリエーション軸へといざなうように、明解かつシームレスに都市軸を連動させることもまちづくり構想を牽引する一つ

の鍵となってくるであろう。

まちなか交流軸は、主要な公共公益施設や生活拠点を結ぶ都市軸として位置づけ、駅空間の再編や景観軸と連動させるとともに、駅東西空間の連続性を確保することで、西側エリアの居住誘導の促進にもつなげることが期待されている。

歩行者空間軸は、地域居住者のウォーキング、観光者・来訪者の観光やまちあるきなど、歩行者優先の道路空間として再編し、オープンカフェやマルシェなど、楽しく賑わいある広場のような歩行者空間を形成するものとして位置づけられている。この歩行者空間軸は、周辺エリアにも足を延ばすきっかけとなる空間としての役割を担うことも期待されている。駅空間の再編により、駅東西空間をつなぐ連続性ある歩行者空間軸を形成することも可能となるであろう。距離と時間感覚の関係で言えば、徒歩10分で概ね８００ｍであり、駅から海までの圏域が概ねこういった条件下にあることも分かる。景観軸との連動を図るなど、健康増進につながるような歩行者空間軸の形成も期待できる。

次にゾーニングについて話を移す。まず、サティスファクションエリアは、駅周辺における既存の公共施設のリフレッシュを念頭に置き、そのポテンシャルを最大限に発揮させて利用環境の改善を図り、広域公共交通の連携充実も促進しながら、駅利用者の満足度を向上させるエリアとして位置づけている。また、駅空間や両駅の前広場を中心に交流・交通機能を充実させるとともに、魚津の玄関口として地域住民や来訪者との多様な交流、世代をつなぐまちの拠点づくりが期待されている。

まちなか居住エリアは、各エリアに隣接し、まちなかでの生活において利便性を高めるエリアとして位置づけられている。駅東側にある公園や行政機関を「パブリックコア」として位置づけ、魚津市庁舎の建替え（２０２３年度完成予定（＊11））に伴って公共施設の複合集約化を行うなど、行政サービスの一元化によるワンストップサービスの実現、公共サービスの充実、まちなか居住環境向上を図ることで、居住誘導促進を図ることも期待されている。他方で、都市部のグリーン帯となる緑地公園「パークコア」の可能性も考えられており、地域住民をはじめとする憩いの場やイベント広場、さらには来訪者からも親しまれるまちなか緑地公園としての役割を担うなど、豊かな住環境形成に資することが求められる。

商業交流エリアは、地域住民はもとより交流人口の誘導も見据えながら、昼夜問わない飲食店街、魅力的な商業・業務・宿泊施設などが連携・競争しながら活性化できるように必要な支援を充実させていくエリアとして位置づけられている。

海岸観光エリア・健康レクリエーションエリアは、多様な自然・地域資源が集積するエリアであり、前述のとおり駅周辺から１㎞にも満たない位置関係にある。地域住民のみならず来訪者の拡充を狙ったサイン計画・デザイン、沿道緑化による街路景観の形成なども一つの手掛かりになるのではないか。

商業レクリエーションエリアは、海岸観光エリア・健康レクリエーションエリアとまちなか居住エリアの中間領域のエリアとして位置づけられている。まちなか居住者をはじめとする地域住民や、観光者をはじめとする来

図5：魚津市火災復興土地区画整理予想図（＊12）

写真5：竣工後の中央通り商店街（1959年頃）（＊13）

写真6：現在の中央通り商店街

写真7：中央通り商店街での賑わい（1959年頃）（＊14）

訪者の賑わいを生み出すような商業・レクリエーション施設の展開を担い、魅力ある土地利用の展開が期待されている。一方で、現在の用途地域が工業地域ということに加えて、海を感じにくい空間になっていることは否めない。そのため、海を感じることのできる空間の設え、海に向かうアプローチ形成など、まちの印象を変えるトリガーとしての役割を果たすことも期待される。

3．旧市街地 電鉄魚津駅周辺のまちづくり

新魚津駅から南に一駅隣り、距離にして概ね1㎞離れたところに電鉄魚津駅がある。電鉄魚津駅周辺は、魚津駅・新魚津駅を核とした新市街地に対して旧市街地として位置づけられる。電鉄魚津駅を降りるとすぐに、アーケードのある商店街の街並みに出会う。一帯の市街地は江戸期における町人街の形成に遡り、大正期から昭和初期にかけて市街地が拡大してきた。商店街の中枢を成す中央通り名店街に加え、駅前につながる新宿通り、銀座通り、文化町通りといった市街地の中心的な繁華街を形成してきた。このうち、1956年（昭和31年）9月に発生した魚津大火を契機に、中央通り名店街を主とする区画の商店街が防火建築帯として改良されることとなった。

中央通りの防火建築帯は、図5に示す火災復興土地区画整理による道路拡幅と連動、1952年（昭和27年）5月に施行された耐火建築促進法に基づき、防火建築帯造成事業を通じて構築された。

当時のわが国において、都市不燃化運動が進んでいた背景もあり、防火建築帯の動きは鳥取市若桜街道（1952年）における防火建築帯の指定を皮切りに、沼津市アーケード名店街（1953年）、宇都宮市バンバビル、そして魚津市中央通りなどをはじめとする地方都市の多くの商店街に大きな影響を与えることとなった。

魚津市中央通りの防火建築帯の設計は、日本不燃建築研究所の今泉善一（＊15）であることが明らかとなっている。そのデザインに着目すると、写真5のように煉瓦タイルによる水平方向の連続性を強調したファサードに加え、垂直方向のRCスリット、屋上にみられる千鳥状の手すりなど、きめ細やかなディテールまで配慮されていることが分かる。簡素なデザインを基本としながらも、その設計思想には新たな時代を見据えた街並み、地域景観の形成への眼差しがあったと言えるのではないか。

わが国の防火建築帯について言えば、その多くが老朽化等の問題を抱え、現在次々と撤去・解体が進められているような状況下にある。時を経た今、魚津市中央通り商店街の防火建築帯は、その一部で増改築が見られるものの、写真6のように当時の面影が今も色濃く残る極めて希少な事例となっている。屋上からは豊かな山海が一望でき、先人たちが見た風景の共有にも思いを馳せることができるとともに、その空間利用にも想像が掻き立てられる。

中央通り商店街については、かつては地域の買物客、寺院参拝客が多く来訪、客足を集めるなど市内でも指折りの賑わいの場となっていたようである。写真7は1959年頃の中央通り商店街でのパレードでの様子であるが、商店街前面のみならず、防火建築帯の内部、屋上までたくさんの人だかりで賑わっている様子が分かる。しかし、近年においては空き店舗、閉店する店舗が目立ち、シャッター街化の進行という課題に直面しているのも現状である。

こうした戦後建築の歴史的資源としての意義や価値の発掘・共有に関する調査研究、知見を利活用した地域の将来像の提案が神奈川大学の取り組みによって継続的に行われている。

また、平成30年度より、富山大学 都市デザイン学部

写真8：学生のフィールドワークの様子

写真9：地域と学生の意見交換

写真 10：防火建築帯のリノベーション事例「藤吉」

写真 11：防火建築帯のリノベーション事例「bel tempo」

都市・交通デザイン学科も商店街の課題解決に向けた取り組みへの参画機会を頂き、道路空間の再編、商業・建築群空間の再編、エリアマネジメント・イベントといった観点から、学生が主体となり課題や魅力の抽出・体系化、将来ビジョンに向けたフィールドワークや議論を行っているところでもある（写真8・9）。

近年の中央通り商店街を取り巻く動きとして、1998年～1999年（平成10年～平成11年）の空き店舗を活用したイベントホールの設置・活用に始まり、2001年（平成13年）の空き店舗を利活用したチャレンジショップ支援事業などの取り組みも実施されてきた。同事業を活用してこれまで全10店舗の出店があり、このうち8店舗が中央通り商店街で開業されている。2012年（平成24年）にはこだわりの地産食材販売、手作り惣菜のテイクアウト、ランチやディナーを提供するカフェが一体となった「藤吉（写真10）」が「がんばる商店街支援事業費補助金」、2016年（平成28年）にはコワーキングスペース「machi-co」が「まちなか開業促進物件整備事業費補助金」といった富山県と魚津市による協調補助金の整備支援を受けて開業している。また、2018年（平成30年）9月には、地産食材等を使用したお菓子屋「bel tempo（写真11）」が新たに魚津市の助成を受けて開業するなど、防火建築帯をリノベーションした若手出店者も増加しており、商店街活性化に新たな潮流が生まれている。

さらに、2018年（平成30年）3月には、まちづくりプロデュースF.O.U.Rが主催となった「防火建築帯FES（写真12・13）」が開催されるなど、商店街の賑わい創出、防火建築帯の認知度向上にもつながっている。

4．駅周辺まちづくりを通じた新市街地と旧市街地の岐路

本稿では、地方都市魚津における駅周辺のまちづくりやその取り組みについて論じてきた。新市街地・旧市街地ともに、次代の魚津の顔・玄関口を担う駅周辺を核にまちづくりの新たな潮流が生まれはじめている。「まち空間の創造と再生」を考えるにあたって、とりわけ地方都市が抱える課題は大きく、岐路に立たされている。中長期の視点で地域の将来ビジョンを明確にし、共有し、一歩ずつ具現化していくことが重要となる。そのためには、これからの時代に求められるライフスタイルを丁寧に捉えることも求められる。日常のライフスタイル、加えて魚津だからこそできる、魚津でしかできない目的に向かう手段を吟味していく必要がある。商店街では、事

写真12：防火建築帯FESの様子

写真13：防火建築帯FESの様子

業や出店者が介入しやすい環境を支える仕組みづくりや充実化も一つの課題となる。また、市域として活性化を図るためには、新市街地と旧市街地をハード面、ソフト面で連動させる施策も重要となってくるであろう。

いずれにしても、「出来るかどうか」を問うのではなく、「どのようにしたら出来るか」を考えることが重要なのではないか。〝豊かで幸せな生活〟とは何か。あるべき目的の本質に立ち返りながら、これからのまちづくりについて考え続けていきたい。

【註釈】

＊1　魚津市「行政区別人口統計表」（２０１８年９月）　http://www.city.uozu.toyama.jp/guide/svGuideDtl.aspx?servno=551（アクセス日：２０１８年９月13日）

＊2　魚津市「行政区別人口統計表」（２０１０年９月）　http://www.city.uozu.toyama.jp/guide/svGuideDtl.aspx?servno=551（アクセス日：２０１８年９月13日）

＊3　魚津市編（２０１３）「１．人口、人口分布図（小地域）」『平成25年度魚津市都市計画基礎調査報告書』魚津市。

＊4　魚津市史編纂委員会編（２０１２）『魚津市史　続巻　現代編』魚津教育委員会、２８２頁。

＊5　魚津市史編纂委員会編（２０１２）『図説　魚津の歴史』魚津市教育委員会、２８０頁。

＊6　『魚津市史　続巻　現代編』、１３９-１４０頁。

＊7　『魚津市史　続巻　現代編』、１４６-１４７頁。

＊8　魚津市（２０１８）「魚津駅・新魚津駅周辺まちづくり協議会資料」

＊9　魚津市「魚津都市計画用途地域図」　http://www.city.uozu.toyama.jp/attach/EDIT/026/026839.pdf（アクセス日：２０１８年９月13日）

＊10　魚津市観光協会　http://www.uozu-kanko.jp/?p=3685（アクセス日：２０１８年９月13日）

＊11　魚津市：魚津市公共施設再編方針、２０１４．　http://www.city.uozu.toyama.jp/attach/EDIT/035/035207.pdf（アクセス日：２０１８年９月13日）

＊12　不燃建築研究会編（１９５９）『燃えない商店建築図集』理工学社。

＊13　不燃建築研究会編、前掲書。

＊14　不燃建築研究会編、前掲書。

＊15　ＢＡ編集部編（２０１７）『ＢＡ／横浜防火建築研究』10＋11合併号、神奈川大学工学部建築学科中井研究室、77頁（ＢＡ特別号　魚津防火建築帯）。

公共空間をまちへ文脈化する
—北本らしい〝顔〟の駅前つくりプロジェクトを事例として—

籔谷 祐介
YUSUKE YABUTANI

1. はじめに

私たちが生活するまちには、誰もが自由に利用できる公共空間がある。例えば、広場、街路、公園等がそれにあたる。本来、公共空間の役割はそこでの人々の暮らしを豊かにするものである。江戸時代に描かれた錦絵を眺めると、街路は人や物で満ちあふれており、活気のある生活やまちの賑わいを演出していたことが伺える。しかし近年では、整備されたもののうまく活用されず、閑散とした風景を生み出している公共空間も少なくない。ハコモノ行政という言葉で批判されるように、かつて景気対策や建設行為そのものを目的とし、完成後の活用・運営方法の検討がされていなかった公共事業が乱発されたことはその原因の一つである。そのような空間は維持管理費の負担によって自治体の財政を圧迫するだけでなく、まちのイメージ自体を悪化させることにもつながりかねず、そうなれば負の資産になってしまう。

これらの反省を踏まえ、１９９０年代から今日までに市民参加による空間デザインの手法が全国に普及している。１９９０年代の市民参加型デザインは、公共空間の計画プロセスに市民参加を促しワークショップ等の方法を用いて意見を聞くことで、利用者のニーズ把握や市民との合意形成に主眼がおかれていた。さらに近年では、ハードだけでなくソフトの重要性も認識され、公共空間の活用・運営主体の育成を目的に市民参加の手法が用いられる例も見られる。しかし一方で、市民参加の形骸化についての批判も見られる。建築家の高野洋平らは、意見を最大公約数的に纏めていくことで建築が無害で中庸なものに陥ったり、コンセプトに合った意見だけを恣意的に取り上げて市民参加を計画の免罪符としたりすることを指摘している(＊1)。そのようななか、公共空間デザインの専門家である柴田久は、設計者が市民参加の主旨やプロセス全体における位置づけを十分に理解し、得られた意見の内容や種類によって最終的な成果がいかに良くなるのかビジョンを持つことが重要であると述べ、公共空間のデザインプロセスにおいて戦略的に市民参加の手法を用いることの必要性を指摘している(＊2)。それでは、公共空間の市民参加型デザインの方法論とはどのようなものであろうか。またさらに、どのような意義があるのだろうか。

2. 市民参加型デザインの系譜と意義

ここではまず公共空間デザインにおける市民参加の系譜について概観する。

社会学者の篠原一は、日本の市民参加は１９６０年代後半に公害、自然保護をめぐる住民運動によって萌芽し、その後爆発的に活性化したと分析する(＊3)。当時の住民運動の萌芽及び活発化は、高度経済成長による都市問題といった住民を取り巻く社会状況に起因するものであり、それに対する抵抗としての側面がある(＊4)。そうした住民運動は、１９８０年代になると対象を公共空間にまで広げた。高度経済成長期に急速に整備された公共空間は、効率や管理のしやすさを重視する行政主導型の計画であると批判された。そこで、市民は公共空間の計画にどの程度主体的に関われるかということに主眼を置き、住民運動というかたちで市民参加が具現化した(＊5)。これが日本の公共空間における市民参加の始まりである。

前述した通り、バブル崩壊後、各自治体はハコモノ行政という批判への対応として、市民のニーズ把握や合意形成を目的に公共空間の計画プロセスにおける市民参加の様々な試みが行われた。都市計画家の林泰義らは日本にワークショップやまちづくりデザインゲーム(＊6)を紹介し、世田谷区などの先進自治体における実践によってその方法論の整理・蓄積を進めた。またアメリカのコミュニティデザイナーであるランドルフ・ヘスター(＊7)が実践する参加型の公共空間デザインの方法論が日本のまちづくり現場に本格的に導入され普及した。このように、日本では欧米型の方法論が取り入れられ、独自に発展・普及していった。そして、この時代に蓄積した公共空間の市民参加手法が今日まで広く実践されている。

２０１０年代に入ると、民主党政権によって「新しい公共」が政策化され、公共の担い手として市民やＮＰＯへの期待が高まった。２０１１年には東日本大震災が発

生し、復旧・復興に向けてコミュニティや人のつながりが見直された。こうしたなか、コミュニティデザイナーの山崎亮はこれからの縮小社会において、ものをつくることだけでは課題解決は難しいと考え、人と人のつながりをつくることで地域課題を解決するまちづくりの方法論をコミュニティデザインという言葉で説明し、日本全国で実践している(＊8)。それは公共空間でも実践されており、公園活性化のプロジェクトではマネジメントの重要性に着目し、空間を活用する市民団体の形成を通して場の賑わい創出に成功した。また都市計画の分野では、開発により都市を「つくる」時代からマネジメントにより「育てる」時代へ移行していると言われており、住民、地権者、事業者等が主体となって行うエリアマネジメントに関心が高まっている(＊9・＊10)。このように、縮小社会を迎えるにあたり、場をどのようにマネジメントするかということに主眼が置かれるようになり、公共空間における市民参加のフェーズが「つくる」から「つかう」に移行している。

公共空間の市民参加型デザインの方法は、そのまちの特性や整備プロセスの段階によって異なると考えられるため、今後はそれらに応じて目的と方法を整理し、戦略的に関係性を育んでいく必要があるはずである。それはより豊かな公共空間の実践につながるだけでなく、市民が公共空間づくりに参加するさらなる意義の発見につながるのではないだろうか。次章以降では、筆者が大学院生として部分的にではあるが参画した「北本らしい〝顔〟の駅前つくりプロジェクト」を事例に、市民参加による公共空間のデザインの方法とその意義について考察する。

3．北本らしい〝顔〟の駅前つくりプロジェクト

(1) プロジェクトの背景

北本市は埼玉県中央に位置する人口約7万人の市で、武蔵野の雑木林や荒川沿いの農村風景等、魅力ある豊かな自然を残している。新宿から電車で45分の距離にあるため、高度経済成長期には東京のベットタウンとして大型住宅団地の建設や駅周辺の市街地化が進められた。しかし、それから30年以上が経過し当時の現役世代は定年を迎え、加えて若者が市外に流出し少子高齢化が進行している。

ＪＲ北本駅は市の中央部に位置し、まちの玄関口として通勤・通学者を東京に送り出すポンプのような役割を果たしてきた。そのため１９７５年に整備された西口駅前広場（写真1）は、昼間は閑散としているのに朝夕だけ送迎の車で混雑し、そのリズムは完全に東京時間に依存してきた(＊11)。しかしながら、今後超高齢社会を迎えるにあたり、駅前広場はこれからの北本市民の豊かな生活を支えるための新しい役割が求められた。そこで、これまで国内外でアートプロジェクト等を通してまちづくり活動に携わってきた筑波大学貝島桃代研究室（筆者も大学院生として所属）と東京工業大学塚本由晴研究室（以下、大学研究室）に、市から駅前広場の改修計画を通してまちづくりの機運醸成と駅前空間の活性化を図るための研究依頼があった(＊12)。ここでは駅前広場の主題を交通広場から滞留・交流広場へと組み替え、中心市街地を活性化することが期待された(＊13)。２００８年、これが「北本らしい〝顔〟の駅前つくりプロジェクト」（以下、「顔プロ」）の始まりである。

写真1：改修前の北本駅西口駅前広場

(2) まちを知り、駅前広場をつくる

大学研究室は「顔プロ」を始めるにあたり、多様な関係者間の情報共有や調整を円滑に行うことが重要であると考え、市に対して2つのことを依頼した。1つは、専属のプロジェクトマネージャーを市側で雇用すること。もう1つは、大学研究室、設計チーム、市庁内の各部署、埼玉県都市計画課で構成される実行委員会を立ち上げることである(＊14)。このプロジェクト体制が基盤となり、多様な主体の参画と柔軟なプロジェクト進行が可能となった。

まず、まちの「顔」である駅前広場を計画するにあたって、その「体」となるまち全体のことを知る必要があった。そこで各種専門家の助言を受けながら、交通、商業、照明、緑、ユニバーサルデザイン、人に関する調査やワークショップを、２００８年度から継続的に大学研究室が主体となり実施した。例えば、緑についての調査では北本に多く残る雑木林（写真2）のかつての役割や現状について明らかにした。雑木林はもともと薪炭林であるだけ

でなく、落ち葉を肥料にするなど農家の生活と深く関わりがあったが、石油エネルギーの利用が進むと手入れがされなくなり、人々の生活から離れていった。そこで北本雑木林の会という市民団体は、北本に残る雑木林を市民が訪れやすい場とするために保全・保護活動を行なっている（＊15）。こうした調査結果は、Ｗｅｂや冊子等によって発信されたり後述する「まちづくり講座」で報告されたりし、駅前広場のデザインだけでなく市民参加のきっかけづくりや題材としても活用された。

写真２：北本に残る雑木林

２００９年度からはハードとソフトの計画を対等に進めていくために、「つくる会議」と「つかう会議」という２つの議論の枠組みを設定した（図１）。

「つくる会議」は、関係者との調整を図りながら駅前広場の設計を練り上げていく実務的な会議である。ここでは形を決めるプロセスを市民と共有するために、様々

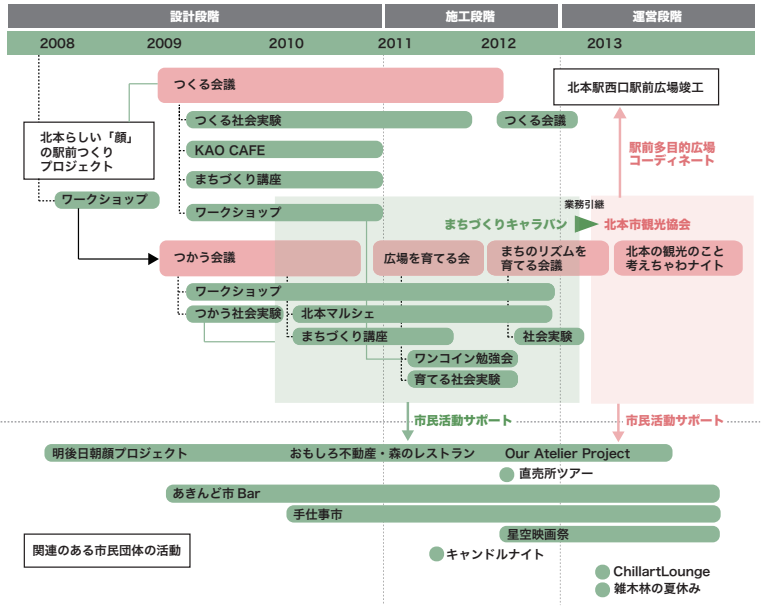

図１：「顔プロ」の変遷図（『新建築』第88巻12号69頁の図をもとに筆者作成）

な市民参加の方法が用いられた。まず、計画案に対する市民の意見を聞くために、模型を駅前広場に展示して市民と対話する「KAO CAFE」を定期的に実施し、それに加え「住民説明会」も開催した。また、デザインのプロセス、デザインをするための情報や知識を市民と共有するために「まちづくり講座」「ワークショップ」「つくる社会実験」を実施した。例えば、緑をテーマとした「まちづくり講座」では、関東平野でこれほど多くの雑木林が残っていることが大変貴重であること、北本ではそれをまちづくりと結びつけ市民団体が景観づくりをしていることが大変興味深いという報告があった（＊16）。ここでは北本らしさを構成する要素としての雑木林の重要性を市民と共有した。また、ユニバーサルデザインをテーマとした「ワークショップ」では、車椅子やギブスを使ったバリア体験を行い、駅前広場にある普段気づかなかった問題を多数把握し、駅前広場の歩道部分の設計の基礎資料を市民と確認しながら作成した（写真３）。さらに「つくる社会実験」では、三角ロータリーの計画案の曲がりにくさや渋滞への市民の懸念を払拭するために、市内の駐車場に実寸大のロータリーを描き、バスや自家用車に実際に走ってもらい市民とともに検証した（写真４）。このように「つくる会議」では、各目的にあった市民参加の方法を用いて、計画のプロセスとデザインの背景にある意味を市民と共有し、ひとつひとつ丁寧に進めていった。

一方「つかう会議」は駅前広場の使い方を検討することを目的とした誰もが参加可能なプラットフォームで、地元高校生や若者グループ、商工会、市民団体等の多世代多職種の市民や市職員が参加した。ここでは将来完成した駅前広場を活用する担い手育成を目指し、駅前広場の使い方

写真３：ユニバーサルデザインワークショップの様子（提供：筑波大学貝島桃代研究室）

写真４：ロータリー検証のための走行実験の様子（提供：筑波大学貝島桃代研究室）

を考える「ワークショップ」とそこで考えたことを既存の駅前広場で試行する「つかう社会実験」を実施した。例えば、地元の商店主、農家、市民団体の協力のもと、既存のバスレーンを一時的に閉鎖して「あきんど市」などのイベントを実施し、市民の反応、混雑具合、動線などを観察した（写真5）。

２０１０年度からは駅周辺の空き店舗を活用した拠点「まちづくりキャラバン」が設置された。筑波大学から委託された常駐スタッフが運営し、「つくる会議」や「つかう会議」の開催、駅前計画の模型や市民のアイデアの展示が行われた。この常設のプラットフォームをハブとし、駅前広場づくりに関わる多様な人々のネットワークが構築された。

写真５：既存バスレーンを一時的に閉鎖して開かれた「あきんど市」の社会実験（提供：筑波大学貝島桃代研究室）

こうして2年間に渡り市民とともに検討してきた駅前広場改修計画は２０１０年度に固まった。その計画では、バス、タクシー、自家用車の停留所を三角形の各辺に配した機能的なロータリーのレイアウトによって、広場が新しい役割を担えるよう新たに植栽帯や多目的広場がつくられた。植栽帯には北本雑木林の会の協力のもと、シンボルツリーとなる根株をまちの雑木林から移植し、まちと広場の連関がつくられた。

（3）まちと駅前広場を育てる

２０１１年度から工事が始まり、「つくる会議」の役割は縮小していった。一方「つかう会議」の検討内容は、駅前広場をどのように活用し継続的に運営するのか、さらに駅前広場だけでなくまち全体をどのように活用するのかと展開し、その枠組みも議論の内容に合わせて「広場を育てる会議」（２０１１年度）、「まちのリズムを育てる会議」（２０１２年度）へと発展していった。

「広場を育てる会議」は、駅前広場にできる多目的広場の活用方法、ルール、運営組織について話し合うもので、毎月ワークショップ形式で開催された。ここには地元高校生や商工会、様々な市民団体が参加し、多様なアイデアを出し合った（写真6）。そうしたアイデアは「育てる社会実験」として、工事中の駅前広場や完成した多目的広場を使って実際にやってみることで検証を続けた。

写真６：「広場を育てる会議」におけるイメージ図を用いたワークショップ（提供：筑波大学貝島桃代研究室）

「まちのリズムを育てる会議」では、駅前広場だけでなくまち全体の活動に視点を拡げ、駅前広場を拠点としながら様々なまちへの関わり方について話し合った。ここで出たアイデアは大学生がライヴ・ドローイングによって1枚の絵として視覚化し、アイデアを実践できる人とのマッチングが行われた。こうした取り組みは、これまでの「社会実験」における試みとまちの多様なヒト・モノ・コトを関連づけ、活動の拡がりや多様性をつくりだした。また、参加者は北本らしさやまちの魅力を再考するきっかけとなり、まちや駅前広場への愛着と主体性を育んだ。

（4）まちと駅前広場を運営する

２０１２年９月に駅前広場が竣工し、「顔プロ」も完了した（写真7）。そこでＮＰＯ法人格の取得を予定していた北本市観光協会に、「顔プロ」のプロジェクトマネージャー、市職員ＯＢ、地元の若者が加わり、業務の一部を引き継ぐこととなった。そして、駅周辺に事務所兼観光情報発信の拠点を整備し、観光という視点を切り口に駅前広場を含めたまちのマネジメントを担うこととなった。

写真７：完成した多目的広場で開かれたイベントの様子（提供：筑波大学貝島桃代研究室）

写真8：「北本の観光のこと考えちゃわナイト」の様子（提供：北本市観光協会）

駅前広場の活用については、市が「北本駅西口駅前多目的広場 使用の手引き」を作成し、市民が自由に利用できる仕組みを構築した。また、西口コーディネート事業として観光協会が市から委託を受け、利用促進活動、イベント支援、テーブル等の什器貸出を行った。それにより、これまで実験的に行われていた「あきんど市」等のイベントが広場完成後も市民が主体となり実施されている。

また、これまでプラットフォームとしての役割を担ってきた「まちのリズムを育てる会議」は、「北本の観光のこと考えちゃわナイト」と名称を変え、引き続き市民・専門家・行政が北本の魅力を増幅するヒト・モノ・コトについて考え、実践していく場として継続している（写真8）。ここでは、様々な団体の活動や場を巡る観光ツアーや雑木林を活用した映画の上映会等、これまで蓄積してきたアイデア・情報・人的ネットワークを生かした主体的取り組みが行われている。

（5）「顔プロ」における市民参加型デザインの要点

ここでは、筆者が考える「顔プロ」における市民参加型デザインの要点を3つ挙げる。

1つ目は、ハードとソフトについて話し合う枠組みをそれぞれ別に設け、それらが目指す目的に応じた方法で市民参加の機会をつくり出していたことである。「つくる会議」では「KAO CAFE」「まちづくり講座」「ワークショップ」「社会実験」等の方法を用いて、適宜計画案を市民に説明しつつ、デザインのプロセスとその根拠となる知識や検証を市民と共有しながら進めた。一方、「つかう会議」の一連の枠組みでは、継続的な「ワークショップ」と「社会実験」によって、市民が話し合ったアイデアを実験的に試行することを繰り返し、活用・運営方法の検討と人材育成に取り組んだ。ワークショップの現場では、活動内容について話し合いたいのに形の話に終始してしまうということによく遭遇するが、このように別々の枠組みとすることによって論点が整理され、集団的創造性が発揮されやすくなった。

2つ目は、計画・施工・運用の各段階ごとにソフトについて話し合う枠組みを変更し、議論の主題を駅前広場からまち全体に拡張していったことである。「つかう会議」の主な議論の内容は駅前広場の使い方であった。その枠組みを「広場を育てる会議」、「まちのリズムを育てる会議」と段階的に変更しながら、議論の内容も広場の運用方法からまち全体の活用方法へと展開させていった。そうすることで、まちの多様な資源の発掘とそれらと連動した駅前広場の活用や運営が可能となった。

3つ目は、市民を中心とした多様なステークホルダーが話し合うための継続的なプラットフォームを構築したことである。このプラットフォームはまちづくりキャラバンなどの空間、定期的なワークショップという機会の両方を含んでいる。「顔プロ」ではそのプロセスを通じて非常に多くの人々が関わることになったが、それらがハブとなり多元的な人的ネットワークが構築された。現在も持続するプラットフォームと多様な活動の実践によってその人的ネットワークはさらに増殖を続けており、それが駅前広場のさらなる多様性をつくり出している。

このように市民参加型デザインでは、議論の枠組みを整理し、計画・施工・運用の各段階に応じた目的と方法を設定することで全体像を描くプロセスデザインが重要である。また、各段階の市民参加を単発で実施するのではなく、そのプロセスを経て集積する多様な資源を蓄積していくためのプラットフォームの構築が重要である。

現在北本では、マーケットなどの駅前広場の活用に加え、そこを拠点としたまち全体をめぐるツアー（写真9）なども行われており、これまで発掘したまちの資源と人的ネットワークが活用されている。また、駅前広場に移植された木の根株はまちの雑木林ネットワークの一部となり、それらの背景にある歴史や活動を駅前広場に持ち込んだ。そうしたネットワークから生まれたできごとによって、雑木林の会ではこれまで後方支援にまわっていた女性たちが女子部を結成し、新しく広報誌を制作するなどの新たな展開も見せている。駅前広場の

写真9：北本の雑木林を巡るツアーの様子（提供：北本市観光協会）

設計者アトリエ・ワンは、空間づくりは様々な事物の相互連関を扱うと指摘しているが(＊17)、このように駅前広場だけで完結させるのではなく、まち全体とネットワークを構築した公共空間の実践は、そこに訪れる人々とまち全体の連関をつくり出し、両者に新たな体験や楽しみを提供する。

4．公共空間をまちへ文脈化する

建築の分野では、「コンテクストを読む」という言葉が使われる。これは建築設計の手がかりとして、その建築が置かれる歴史的、文化的、地理的な背景となる条件、文脈を読むということである(＊18)。公共空間の実践において改めてこの意味を考えると、「コンテクストに埋め込む」ということが重要であるのではないだろうか。つまりそれは、まちを構成するヒト・モノ・コトという様々な資源との連関を構築することであり、公共空間をまちのネットワークの一部として存在させるということである。もちろん、空間をつくるということ自体、他のネットワークの一部となることは避けられない。建築家の能作文徳は、空間を構成するモノの持つナラティブな価値の可能性を指摘している(＊19)。まさにここで重要なのは、その空間に関わる人々の生活に、豊かさを提供する「ものがたり」を内包した多様なヒト・モノ・コトとの連関である。その「ものがたり」がいわゆる地域性や固有性の手がかりとなる。空間はその連関によってまちの多様性を引き受け、多様な人々を許容する場としての力を発揮する。さらに、そこでの出来事が新しい「ものがたり」をつくり、新たな連関を生み出す。今、公共空間に求められているのは単発的なイベントで賑わいを表出することではなく、そうしたまちとの相互連関を持った空間としての役割である。そのような空間は多様な人々が集まり、生き生きとしたまちの生活を支える場となるはずである。そうした公共空間の実践にこそ、市民参加の意義があるのではないだろうか。

【註釈】

＊1　高野洋平、森田祥子（２０１７）「公共建築における市民参加の系譜 - 多元的な建築を目指して」『10+1web』ＬＩＸＩＬ出版。http://10plus1.jp/monthly/2017/10/issue-02.php（最終閲覧２０１８年11月３日）

＊2　柴田久（２０１７）『地方都市を公共空間から再生する 日常のにぎわいをうむデザインとマネジメント』学芸出版社、27頁。

＊3　篠原一（１９７７）『市民参加論』岩波書店、95頁。

＊4　和川央（２００５）『政策形成過程における住民参加機能についての一考察』博士前期課程（総合政策）論文、24頁。

＊5　高野洋平、森田祥子、前掲書。

＊6　ヘンリー・サノフ（１９９３）『まちづくりゲーム――環境デザインワークショップ』晶文社。

＊7　ランドルフ・Ｔ・ヘスター、土肥真人（１９９７）『まちづくりの方法と技術―コミュニティー・デザイン・プライマー』現代企画室。

＊8　山崎亮（２０１１）『コミュニティデザイン―人がつながるしくみをつくる』学芸出版社。

＊9　小林重敬（２０１５）『最新エリアマネジメント―街を運営する民間組織と活動財源』学芸出版社、10頁。

＊10　国土交通省土地・水資源局編（２００８）『エリアマネジメント推進マニュアル』において、エリアマネジメントは「地域における良好な環境や地域の価値を維持・向上させるための、住民・事業主・地権者等による主体的な取り組み」と定義されている。

＊11　アトリエ・ワン（２０１４）『アトリエ・ワン コモナリティーズ - ふるまいの生産』ＬＩＸＩＬ出版、２３４頁。

＊12　日本建築学会編（２０１４）『まち建築 まちを生かす36のモノづくりコトづくり』彰国社、89頁。

＊13　塚本由晴、貝島桃代（２０１３）「北本らしい顔の駅前つくりプロジェクト」『新建築』第88巻12号、66頁。

＊14　アトリエ・ワン、前掲書、２３４ - ２３５頁。

＊15　アトリエ・ワン、前掲書、２４０頁。

＊16　北本らしい〝顔〟の駅前つくり実行委員会編（２０１１）『北本らしい〝顔〟の駅前つくりプロジェクト本』、58頁。

＊17　アトリエ・ワン、前掲書、２４３頁。

＊18　日本建築学会編（２００１）『建築学用語辞典 第2版』岩波書店。

＊19　能作文徳（２０１５）「建築におけるアクター・ネットワークとはなにか：《高岡のゲストハウス》」『10+1web』ＬＩＸＩＬ出版。http://10plus1.jp/monthly/2015/02/issue-04.php（最終閲覧２０１８年11月７日）

万葉ベビーカー行脚
―子育てからみたまち空間・高岡とその周辺―

藪谷 智恵
CHIE YABUTANI

インスタレーションという、場所や空間全体を体験させる芸術表現があるけれど、親になることは、子どもがいるというインスタレーションのなかにずっといることみたいだ、と思う。子どもは、世界の受容のしかたを変えるし、世界そのものも変える。子どもがいるということは、時にかろやかにユーモラスに、時に重々しく深刻に、一人でいた時とは違う身体、違う空間を、つねに引き連れているような感がある。

私は妊娠出産という身体の大きな変化を体験して、また子どもが存在として外に出てきたことで、気づくこと、重視することが変わった。子どもは、圧倒的に小さくて弱い存在だから、まず子どもを守ることを一番に考えるようになった。それから、子どもが喜ぶことが何よりも嬉しいから、子どもを喜ばせること、子どもを笑わせることを考えるようになった。子どもにとってこれはどういう意味があって、どういう面白さがあるか、子どもを通じてのものの見方が内面化されて、それはこれからどんどん進んでいきそうだし、自分の幼い頃を追体験していくだろう予感もある。

子どもがいると、世界の側も、それまでとは違う顔をみせる。歩く道が、お店が、電車の中が、まちが、大人だけでいるのとは違う場に変容する。

■知らない土地で初めての子育て

私の高岡での暮らしは、初めての子育てと同時にはじまった。

夫婦ともに実家から遠く離れた、親戚も友人もいない、訪れたことすらない土地に、夫の仕事の関係で住みはじめたのは、半年前のことだった。地元の産院で里帰り出産をした私は、花曇りの肌寒い春のある日、月齢一ヶ月の娘と二人、先に新生活をはじめていた夫に合流した。

当初私は、土地勘のない場所での生活に不安を覚え、焦っていた。

大人になれば、自分にとって心地よいコミュニティのなかだけでも生きていける。私はいくつかの土地で暮らした経験から、大人だけであればいかようにもやっていける自負はあった。どこの場所にも価値観の近い人はいて、行きたい場所、興味のある催しに出掛けて行けば、自然と知り合い、友人はできていく。時間はかかっても、のらりくらりやっていけばそのうち慣れる。最悪慣れなくても生きていける。買い物はネットでできるし、必要があれば都内でもどこでも必要が満たされる場所へ行けばいい。けれど子どもはそうはいかない。大人と子どもでは、住んでいる土地から受ける影響の大きさも移動の負荷もまるで違う。私自身も出掛けるのは基本的に子どもにとって負担にならない場所へ、負担にならないスケジュールでとなる一方で、土地に慣れること、地域を把握することは、とても急を要することに思われた。

まず予防接種のスケジュールをこなしていくこと、そして何か病気をしたときのために、信頼できる小児科を見つけておかないといけない。保育園の申し込みまでに、市内にいくつもある保育園の場所や雰囲気を把握したい。状況によっては、引越もふくめて検討する必要が出てくるかもしれない。のびのびと走り回れる公園や休日に遊びに行ける場所、どこが子育て世代に人気のエリアなのか、治安の悪い場所というのはあるのか、ないのか、そういうことも知りたい。

親戚や友人がいないというのは単純に頼る人がいないというだけでなく、とにかく、土地のことがわからないのだ。ある程度の期間住んでいれば自然と持てるはずの、あのあたりはああいう感じ、このあたりはこういう感じという、肌感覚がない。その圧倒的な情報のなさ、蓄積のなさ。とはいえ、ないものはないのだから仕方がない。私はとにかく出掛けて、身をもって体感しながら、街について知ろうと思った。自分のなかに立体的な地図を描くのだ。こうしてベビーカーを押しながら、街中を歩く日々がはじまった。

■街に流れてきた時間、古い場所と新しい場所

私たち家族が住んでいるのは吉久という、高岡の中でも海に近い、庄川と小矢部川に囲まれた中州のような場所だ。水運に恵まれた立地から江戸時代には加賀藩の米蔵がおかれ、明治時代には米穀問屋が軒を連ねたそう

で、伝統的な格子戸をもつ木造建築が並ぶ表通りは、たしかに違う時代にきたような感覚を抱かせた。同時に、水運の利は工場の立地条件としても適しているから、小矢部川沿いは工場が立ち並ぶ工業地帯でもあって、吉久は工場に囲まれた伝統的建造物ののこる街という、なんとも不思議な景観を持っている。

高岡は古代から現代まで、さまざまな時代の要素が層をなして感じられる、いわゆる歴史のある街だ。まず、加賀の前田家二代目当主、前田利長が築いた城下町としての空気が色濃い。まちなか、と呼ばれる中心市街地には当時のままの町割、町名がのこり、中心にある古城公園も、伝統工芸や、国宝に指定されている瑞龍寺も、利長ゆかりのものだ。

駅北側には、江戸時代の町割がのこる「まちなか」があり、その外側には拡大されていった市街地に住宅街が続き、海の近くにはまた歴史ある街並と工場群が混然と、けれど静かに佇んでいて、それらをゆっくりと走る路面電車が繋いでいる。さらに、吉久とは小矢部川を挟んで反対側、能登半島のつけねに連なる伏木は、奈良時代に大友家持が国守として派遣されていた場所で、万葉集に収録されている彼の和歌の約半数がそこで詠まれたことから、高岡は万葉のふるさととも呼ばれている。

一方駅の南側は新しく開発された地域で、新幹線の停まる新高岡駅周辺にはショッピングモールと、芝生広場にじゃぶじゃぶ池のある大きな公園があり、宅地化が進んでいる。

私はベビーカーに娘を乗せて、ある時は市役所へ手続きに出向き、ある時は予防接種に出掛け、またある時は子育て支援センターへ、図書館へ、高岡大仏へ、古城公園へ、伝統的建造物保存地区のカフェへ、雑貨屋へ、保育園の見学へ、ショッピングモールへ、芝生広場のある公園へと出掛けた。

そして気づいたのは、あらゆる空間は子どもが過ごす前提で作られている場所と、そうでない場所の二つに分けられるということだった。

写真1：高岡大仏の前で

写真2：近所の路地にて。トタンとガルバリウムが特徴的な高岡の家並みが、はじめは重々しくて苦手だった

■あらゆる空間は二つに分けられる。子どもありきか、そうではないか。

高岡において、昔からある場所と新しい場所は、ほとんどそのまま、子どもを前提としている場所とそうでない場所に分けられるようだった。

私は基本的には、世界中がどこも似た景色になっていく流れには抗いたいと思っている。その土地ならではの食べ物、工芸、建築その他文化をみていきたいし、それらをのこしていくための一端を担いたいと思って、二十代は伝統工芸の布の産地で働いた。ショッピングモールは価値観としてはある意味でその対極にある。それが出産後、モールに行く頻度が激増した。どうしてモールが人で賑わっているのか、やっとわかった。

理由はとても単純なことなのだが、ショッピングモールはそもそもが、子ども連れで出掛ける場所として作られているのだ。

子育てにおける子ども用品の買い物というのは、哺乳瓶にベビーカーにチャイルドシートに抱っこ紐に寝具に服におもちゃに絵本に衛生用品に離乳食関連品にプレイマットに安全対策グッズに防寒グッズにと、調査検討も含めるとけっこうな量のある作業で、産前に準備しておくものはもちろん、産後も子どもの成長に応じて締切に追われるように揃えるべきものが出てくるのだけど、まず子ども用品の専門店はモールにあって、それらはほとんどセットだといえる。そして施設内にはオムツ替え専用スペースがあり、授乳室がある。どこで授乳するか、というのは乳飲み子を抱えた外出では常に気に留めておくべきことで、授乳室があることはそれだけで、その場所に行く理由になる。さらにモール内では、ベビーカーを出したり畳んだり、抱っこ紐やチャイルドシートに入れたり出したり、室内外の気温に合わせて服を着せたり脱がせたりしなくてよく、そのため子どもがせっかく寝たのに起きてしまう、というような事態にもなりにくく、ストレスが少ない。雨風の心配もしなくていい、車の危険もない、ベビーカーで楽に移動できるフロアの中に、子ども用品店もあれば、食料品の売場も、日用品の売場も、服屋も、子どもが泣いても気兼ねしないでいられるフードコートも、あまつさえ子どもの遊び場まであるというモールはほんとうに便利で、食べる、移動する、排泄する、着替える、といった生活における基本動作に大

人の何倍も手間のかかる育児において、便利さの価値はほんとうに高い。

そして、そうしたモールの周りの住宅街は、歩道が広く、車道としっかり分けられている。所々に公園が整備され、植栽はきちんと手入れがされていて、見通しがいい。

一方で古くからのまちなかには、子ども用品のお店はないし、子どもを意識した公園もない。古城公園はとても立派なお堀に囲まれていて、落ちたら溺れると考えるのは心配しすぎとしても、入り口から公園内部までに距離があって、子どもが安心して遊べるつくりにはなっていない。園内の木々は立派だけれど鬱蒼としていて、死角も多い。砂利道はベビーカーに不向きだし、一周ぐるりとまわろうとしても、階段部分があって阻まれる。つまり乳幼児のための公園ではない。江戸時代の町割に、子どもたための公園はないのだ。古い建物をリノベーションしたカフェは気分転換には嬉しいけれど、そこで過ごしている人の多くは日常を離れた落ち着いた時間を過ごしたいと思っているわけで、もし子どもが泣いたらそのくつろぎを邪魔してしまうと思うと落ち着かない。歩道のない道も多く、あっても段差が急だったり、傾斜していてベビーカーを押すのに物凄く苦労させられたりする。

写真3：万葉線の車内から

写真4：駅に続くアーケード商店街

写真5：吉久と伏木を結ぶ橋の上から

賑わっているのは、明らかに、ショッピングモールであり、見通しの良い整備された公園だった。吉久の通りはただただ静かで、高岡駅北口から続く商店街は立派なアーケードがむしろ寂しさを助長するほど人がまばらで、シャッターの閉まった店もあり、路面電車は絶対に座れる。いったい人はどこにいるんだろうと思ってモールに行くと、そこにはいくつもの人だかりがあって、その近くの公園の水遊び広場は混んでいるほどだった。同じ高岡という都市にいながら、世界は二つあるみたいだった。子どものいる親は、その場が発しているメッセージを敏感に読み取る。安全で安心で便利ということの価値は、子どものことを意識してつくられている場に行くのは、中心市街地の空洞化、高齢化という問題をどう考えるかは別のこととして、至極当然のことに感じられた。けれど私は、子どもも一緒に、子どものために作られた場所以外にも、行きたい。

■踏み出すごとに徳が積まれるような

私に、私が感じている以上の子どもの価値を教えてくれたのは、高岡の、昔からあるほうの街の人たちだった。

吉久の、歩道がないのはもちろん車がすれ違うこともできない細い道を散歩していると、必ず「赤ちゃんかわいいね」と声をかけられた。すれ違う人は足をとめ、庭先で作業していたり玄関先で井戸端会議をしている人は「赤ちゃんみせて〜」と通りまで出て来て、ベビーカーの中の娘をみて、「かわいいかわいい」と言った。何度も会う人もいれば、一度きりの人もいた。ただどんなおばさん、おばあさんも、ベビーカーに吸い寄せられてくるようだった。

万葉線では、運転手さんが私たちを優先席に案内してくれ、降りる駅を気にかけて、ベビーカーの乗り降りを手伝ってくれた。娘を一生懸命にあやしてくれる人もいた。駅北口の郵便局では、窓口の人が「赤ちゃんみせて」とカウンターの中から出て来て、私の後ろに並んでいたお客さんと一緒に、娘のことを愛でてくれた。信号待ちをすれば、隣り合わせたおばさんが娘の笑顔をとても喜んでくれた。ベビーカーを畳むのを手伝ってくれたおばあさんは、何度も何度も、子どもは宝だから、宝だからと、可愛い子を拝ませてくれてありがとう、ありがとうと感謝してくれた。

娘をベビーカーに乗せて静かな高岡の街を歩く私は、だんだん、自分が運んでいるのは、私の娘という以上の、ほんとうに大事で貴重な、光を発する存在であるような気がしてきた。娘を連れて歩いているだけで、なんだかとても良いことをしている気がするのだ。一歩踏み出すごとに、徳が積まれていく、何かの修行をしていると錯覚しそうだった。

子宝という言葉があるけれど、きっと子どもというの

は、本当に、宝なのだ。仏様でもお地蔵様でもない、ただの子どもが、人全体にとって、嬉しい、かわいい存在なのだ。

赤ちゃんを巡るやりとりは、どこであっても、多かれ少なかれ生まれるものだとは思う。娘を抱いて、東京都内を通過する混んだ電車に乗ったときにも、娘をあやしてくれる人、笑顔を向けてくれる人はいた。ショッピングモールの中でも、話しかけてくれる人はいた。

けれどもやっぱり、私が特別な感慨を抱くほどの言葉を向けられたのは、人と人との距離が近い、古い街だからこそだったと思う。道行く人と挨拶をし合うのが基本であるような、人と人が繋がっていることが前提であるような場所。

今の日本は、子育てがとても大変なものになっている。昨日も電車内での赤ちゃんの泣き声に暴言を吐かれたお母さんを巡る議論がニュースになっていた。電車に響く赤ちゃんの泣き声は迷惑、という意見と、働かねばならない母は赤ちゃんを背負って電車に乗らざるを得ない、仕方がない、という意見が交わされていたけれど、いずれにしても、赤ちゃんの存在がお荷物になってしまう環境が、かなしい、と思う。

私は万葉線の降り口付近に座っていて、降りて行く人にそのつど、何人もの人に入れ替わり立ち替わり、「赤ちゃんかわいいね」と言われ続けたことがある。暴言を吐かれたお母さん、三十分だけでもいいから、ここに来て一緒にこの電車に乗れたらいいと思った。育児に行き詰まったら、自分のやっていることの価値が見えなくなったら、ここに来て、三十分でもベビーカーを押して歩ければいいのに、と思った。

歩いているだけで喜んでもらえて、こちらも嬉しく、相手も嬉しいのがまた嬉しい、嬉しさが続いていく。子どもは宝で、子育ては尊い仕事なのだ。この気づきは、子どものための場所、同質性の高い集まりの中では、たぶん得られない埋もれてしまうもので、でもとても大事な、ほんとうのことだ。

写真6：お散歩中、近所のおばあさんの手を握らせてもらう娘

■子どもがいる世界

子どもがいると、世界が優しくなって、特別なことが起きる。それを強く実感したのは、地元から遊びに来た友人家族を案内して、近隣観光に出掛けたときのことだった。

赤ちゃん二人、幼児一人、大人四人の旅。歴史ある街の散歩と立山連邦の景色を楽しんだ翌日、私たちは雨晴海岸へ出掛けた。高岡というと城下町、古い街並のイメージが強いけれど、実はとても海が近くて、まちなかから車で二十分もあれば海岸に出ることができる。そしてその雨晴海岸はほんとうに美しい。

私と友人の地元、藤沢は、片瀬海岸に江ノ島のある湘南地方で、海と、海がつくりだす海辺の空気感が名物の場所だ。南向きの海は明るくて、いつも賑わっていて、それでいてゆったりとした時間が流れていて、とても居心地がいい。

けれども北向きの海もいいものだ。快晴の雨晴海岸を訪れて、心からそう思った。光を反射しすぎない海は、晴れていても青い色がきれいによく見える。そして、景観の美しさに対して、人が少ないのがいい。道路は渋滞していないし、余計な建物もなければ看板もない。プラ

写真7：雨晴海岸の貝たち。ほんとうに小さくて、けれど精巧なつくりをしているのが赤ちゃんと似ている

写真8：大人の高い目線では気づかなかっただろう、貝に気づいた瞬間

イベートビーチ、といったら大袈裟だけれど、それに近い感がある。もちろん観光の人はいるのだけれど、人の多さにうんざりすることが全くない。

渚の手前でじっとうずくまる友人の子どもがみつけたのは、目を凝らさないと気づかないほど小さな貝だった。雨晴の浜を構成しているのは、小指の爪よりも小さい貝だったのだ。富山湾の、日本の魚種の過半数が獲れるという海の豊かさに興奮して、私たちはしばし貝拾いに没頭した。

昼食後も海辺観光を満喫した後で、今度は山に行こう、と高岡と氷見にまたがる山間沿いのカフェに行くことになった。カフェの窓からみえた家々がとてもきれいだったから、私たちはその山に囲まれた集落を散歩することにした。ずっと忘れないだろう、心が揺さぶられる出来事があったのはそのときだった。

山からおりてきた夕方の空気は、とても良い匂いがした。どこかの家でおでんを煮ているような、美味しそうな出汁の匂いも漂っていた。それから、金木犀。庭先には柿の木、紫色の菊。里の秋を堪能しながら歩くと、ちょうど背景に山並みが広がる開けた場所に出て、私たちはそこで記念撮影をすることにした。セルフタイマーを押して、ポーズをとって、ぱちり。その後も映りを確認したり、道を調べたり、しばらくその場に留まっていると、「どこのうちの子?」と、小さなおばあさんに声をかけられた。観光地ではない集落を、こうして家族連れで歩いているのは珍しいのだろう。私が高岡に住んでいること、友人が地元から遊びにきたので近隣を観光していることなど伝えていると、友達の子どもが摘んで手に持っていた昼咲月見草を、ふっとそのおばあさんに差し出した。

おばあさんはとても喜んで、朝晩二回、仏様の祠に毎日手をあわせにいくそのときに、このお花もお供えするよ、と、このあたりの方言のある言葉で、それはそれは嬉しそうに話してくれた。

私は、どこから来たのか聞かれた時に、警戒されているのかと一瞬考えてしまった自分を恥じた。知らない顔だから、ただ単純に声をかけたのだ。こういう声かけ、地域の目が、子どもを見守ってくれるのだろう、と思った。

ぐるりと畑の中を歩き、車を停めてきたカフェに続く広い道路まで出ると、今度は大きな柿の木のある家のおばあさんに、「どこの家に遊びにきたの?」と声をかけられた。ただ家族連れが散歩していること、それが珍しいのだと思った。再び同じ説明をすると、今度は「柿をもっていかれ」と、おばあさんは高枝切り鋏を持ち出して、ポキンポキンと実のついた枝を取り始めた。

柿はどんどんと集められ、いつのまにかおばあさんが用意してくれたビニール袋いっぱいになっていた。私たちは突然の柿狩りの機会を喜んで、おばあさんとの出会いを喜んで、また車に戻ろうとして歩き出した。日はだいぶ落ち始めて、空の色はうす赤く染まって、街灯の明かりが目につき始めていた。寒くなる前に戻ろう、と足を早めたとき、見覚えのある人が自転車で通りかかって、私たちの前で停まった。さっき、記念撮影をしたときに話したおばあさんだった。

「仏様にお供えするよ」

自転車のカゴにまだ昼咲月見草をいれたままのおばあさんは、そのカゴから、赤ちゃんも食べられるおせんべいの袋を取り出して、友人の子どもにすっと渡した。お花の御礼にあげようと思って、私たちのことを自転車で探していたらしい。柿狩りをさせてもらったことを話すと、「柿のある家は、キヨちゃんちかねえ」と、小さい子どもが仲の良い子のことを話すみたいに、ほんとうに屈託のない笑顔で笑うのだった。

おばあさんと別れてから、どれくらいの時間が経っていただろう。どれくらいの間探してくれていたんだろう。わざわざ家に帰って、自転車に乗ってきてくれた、探してくれたと思うと胸がいっぱいになった。昼咲月見草が、おばあさんを掻き立てたんだと思った。きれいなものをすっと差し出せる子どもの感性と、それをほんとうに嬉しく感じてくれるおばあさんの感性が響きあって、とてもとても美しいもの、きらきらと光るものが、その時のその場所に現われていた。山間の集落と、私たちと、おばあさん、それぞれの世界が、子どものさりげない、でも子どもだからこそできる行為で、ひとつに重なった。人と人が繋がること、それがこんなに心を揺さぶるなんて知らなかった。子どもがいる世界はなんて豊かなんだろう。

この出来事のおかげで、この日みた景色の美しさも、いっそう光を増すように感じられた。山からあがる水蒸気、畑からあがる焚き火の煙、緑濃く重なる稜線。貝で埋め尽くされた砂浜、深い青の水平線。そしてそれらに擁されている高岡という街が、奥ゆきをもって、立体的に感じられた。

ずっと昔からの営みが色濃くのこっている場所と、新しくつくられた場所と、海と、山があるところ。そこで人が暮らしているところ。この自然の地形のある土地だから越中国府がおかれ、前田利長も城を築いたに違いない。歴史の縦軸の奥ゆきと、自然環境の横軸の広がり、それが交わる場所。ここで子どもを育てていくことは、とても良いことなんじゃないか。

■まだ見ぬ出会い、まだ見ぬ子育て

遠くに近くに聞こえてくる太鼓の音で目が覚めた。夢の中でも鳴っていたお囃子の音。起き上がると、やっぱり太鼓の音がしている。そういえば今日は吉久の秋祭りだった、とぼんやり考えていると、ガラガラ玄関が開いて、法被を着た人が「もうすぐ獅子舞がきます」と言った。

慌てて着替えて、娘を抱いて表に出る。隣の家の玄関の前で、お化粧をしてきれいな着物を着た子どもが、獅子舞の前で躍っている。白く縫った頬に赤い丸のお化粧。水色の鉢巻きに、ピンク、赤、紫、蛍光緑の花笠、派手な橙色の着物。小学生くらいだろうか、一生懸命跳ねている。私は獅子舞のことは全然目に入らず、お囃子の車や笛や太鼓の人だかりの向こうにいるその子ばかり見ていた。大切な役割を負わされているだろう子どもは、なんとも言えない空気をまとっていて、目が離せなかった。こちら側と向こう側を繋ぐのはやっぱり子どもなんだ、と思った。

これまで全く知らなかったけれど、富山は日本でも有数の獅子舞行事がのこる、獅子舞県であるらしい。その日に出掛けた帰り道、いつもは人が住んでいるのか不安になるくらい静かな通りの家の窓が開け放たれて、大きな人だかりができているのに遭遇した。これから獅子舞がきて家の中で舞うらしい、それを皆待っているのだという。

高い声がして見上げると、肩車された子どもだった。隣にいる女の人は抱っこ紐で赤ちゃんを抱いて、さらに腰ほどの背丈の子どもと手を繋いでいる。見回すと肩車された子どもは何人もいて、路地から、家々から、手を引かれたり連れ立ったり、子どもと、彼らの親だろう若い男女が続々と出て来ていた。驚いたことに、人だかりは若者と子どもでできていて、到着した獅子舞を囲むお囃子の人たち、神輿をかつぐ人たちもまた、若者と子ども達だった。

写真10：夜の獅子舞

観光で来ている人はいない。誰もがちょっとそこまで、といういでたちでいた。誰かにみせるためではない、ただ土地の人のために続いてきたこと、という空気だった。見世物として集客しようとかＰＲしようとかの意識のない、素朴な、けれど他の多くの場所では失われてしまった、土地や自然と人が結びついている空気が、なにももったいぶらず、大袈裟にせず、当たり前のもののようにぽんと差し出されていて、それを担っているのは若者で、気負いもなく、ただ楽しそうだった。昔からある場所と新しい場所、おじいさんおばあさんと、若者、子ども達がいる場所の組み合わせ。私がこれまで高岡でみてきた景色と、その日みた景色は全く異質だった。

私はやっぱりまだ、この土地のことを全然知らない。

まだ見ぬ出会いと、ここだからこそできる子育てがあるはずで、それがどういうものになるのか、今はただ楽しみにしている。

お囃子はその日の夜遅くまでずっと、遠くに近くに、鳴り響いていた。

宿泊体験施設「さまのこハウス」

横山 天心
TENSHIN YOKOYAMA

■金屋町元気プロジェクトについて

地元住民を中心とする約20名で構成され金屋町元気プロジェクトは、２０１３年11月に設立され、２０１７年にＮＰＯ法人の認定を受けた。「高岡鋳物発祥の地として、地域住民が住みやすい街、来街者が訪れたく、住みたくなるような街」を目指し、特に子育て世代や若手クリエイターを対象とした移住を促進することを目的として、金屋町元気プロジェクトと行政が協働で金屋町の定住促進計画の作成や情報発信事業などを行ってきた。国や県や市の支援を受けてはいるが、住人５１０人の小さな自治会が、県の定住促進モデル地区の指定を直接受けて（他地区は市町村行政が主体）、住民が主体となり、街の伝統や文化に誇りをもって、自分たちの街は自分たちの手でより良くしていくことを念頭に、移住促進の諸活動を行っているのは全国でも類を見ないことである。具体的には先進地視察（18回）、移住希望者と空家持主とのマッチング（情報提供42件、空家内覧案内30件）、空家状況の調査（年1回、3回実施）、御印祭（加賀藩二代藩主、前田利長公の威徳をしのんで毎年6月19・20日に金屋町で行われる祭）、金屋町楽市inさまのこ（工芸×生活×産業が同居する、高岡市金屋町の町屋と街路を使って行うゾーンミュージアムイベント、２０１８年より「ミラレ金屋町」に名称を変更）など金屋町の魅力を来訪者に体験してもうイベントの企画・運営などである。

写真1：石畳通り側外観
（以下、写真は全て池田ひらく氏撮影）

空き家を工房や住居などに利用したい方と空き家所有者とのマッチングのさらなる促進や、金屋町の良さを長期滞在によりより良く体験してもらうため、旧夏野邸を伝建地区にふさわしい内外観に改修した母屋と既存増築部を改築した新築部を併せ持つ宿泊体験施設「さまのこハウス」にすることが計画された。また、その建設資金は文化庁の修理・修景補助事業、県の移住希望者宿泊体験サービス事業、地元企業からの寄付金、クラウドファンディングなどにより調達し、施設の建設及び運営に対して、参加メンバーが無理なく継続して活動できるよう配慮されている。

写真2：千保川側外観

写真3：中庭（母屋側外観）

写真4：中庭（新築棟側外観）

■芸術文化学部の学生の関わり

本計画は２０１４年から始まり、当初案は、当時芸術文化学部４年生の波多野歩実さんが卒業制作の一部として、母屋と増築部を共に改築することで進められた。母屋一階の廊下部分を通り土間とし、増築部一階をキッチン＋カフェ＋土間として、石畳通りと千保川側の通りを土足で行

き来できる計画であった。その後、用途が専用住宅から簡易宿所に変更となること、施設全体として現行法規の基準を満たすことが難しいことから、石畳通りに面する母屋は改修し、増築部は解体して中庭を介して新築棟を建設し、外部の渡り廊下で繋ぐことになった。変更された方針に従い、再度基本計画をリノベーション演習Bの授業課題とし、履修生と共にスタディを重ねた。その成果をまとめた図面と模型を学生たちが、元気プロジェクトの協議会でプレゼンテーションを行い、協議会の承認を得て、現行案のアウトフレームが固まった。そしてそれを基に、芸術文化学部卒業生の外崎夢大氏(富山クリエイティブ専門学校講師)と協同で、基本設計・実施設計・現場監理を行った。

また、工費削減のため、中庭の土間及び砂の版築と隣地境界に設けられた千本格子は有志の学生達と協同で制作している。版築は砂・砂利・セメントの配合のスタディに始まり、型枠の制作・設置、砂・砂利・セメントの配合・充填・転圧の工程を全て自分たちの手で行った。

写真5：中庭の版築の制作過程

写真6：母屋1階　通り土間

写真7：母屋1階　通り土間（夕景）

■金屋町の新しいライフスタイル「デュアルハウススタイル」

金屋町の町屋の敷地は間口がそれほど大きくない分奥行があり、その敷地を埋め尽くすように町屋が建てられているため、町屋の延床面積は40坪から50坪程度あるのが普通である。その全てを、現代のライフスタイルに合わせて改修すれば費用的にも大きな負担となり、下手をすれば郊外の新興住宅地で土地を購入し住宅を建設するより費用がかかる場合もありえる。そこで、石畳通りのようにメインストリートに面する部分は、文化庁の修理補助事業の補助金を用いて、建設当初の趣のある外観に復元しつつ、内部はできるだけ手をかけずに計画する一方、奥の部分は、住環境を担保する現代的な設備を設けつつ、断熱性能や気密性能を向上させるとともに、現代のライフスタイルに合った内装に大体的に改修することが望ましいと考えた。これば、同一敷地内に、住性能としてもインテリアの意匠としても新旧のスペース（住戸）を設け、時間や季節や使用用途に合わせて、それらを行き来することで得られる豊かな生活があり得ると考えたからだ。

写真8：母屋1階　和室

写真9：母屋2階　和室

写真10：新築棟1階　リビング

「さまのこハウス」では、このコンセプトをより顕在化させ、石畳に面する伝統的な町屋を一部保存し、現代的な設備機器を備えた新しい町屋を中庭を介して独立して設けている。

歴史的な町屋は、ファサードや屋根等の外観を復元・修理し、内観は通り土間を復元し、襖や障子を開け放つことで水平的な空間のつながりを有する、畳や真壁によるの和のインテリアとしている。

一方、新しい町屋は、敷地の高低差を利用して設けた半地下には車庫や浴室などの水回りをまとめ、一階は中庭からキッチン・ダイニング、リビングと段状となり、その上部の個室もそれぞれ階高が異なるスキップフロア構成となっている。吹抜けを介して斜めや垂直的な空間のつながりを有し、フローリングや大壁による洋のインテリアとしている。

さらに、双方をつなぐ中庭は、和と洋を融合した植栽を施し、砂の版築と珪砂（鋳物用の砂）の敷き詰めにより鋳物の鋳込み場を想起させる段状の構成とすることで、至る所に座って佇むことができる。新しい町屋は、歴史的な町屋では得られない空間体験を可能とすることで、歴史的な町屋の空間特性を顕在化し、双方の対照的な空間を中庭を介して行き来することで、より多様なシーンが生まれる。

また、古い町屋を改修して快適に過ごすためには熱環境の改善は必須だが、既存の改修施設では利用者が断熱をどの程度施しているかを内外観からは把握することは難しい。そこで本施設では、エアコンは据え付けているがあえて断熱工事は行わず、古き良き町屋をできるだけ建設当初に復元した部分（母屋）と、現代のライフスタイルに合わせた空間構成と住性能を持たせた新築部を分棟配置して明確に区分することで、移住希望者が長期滞在を通して、古い町屋と新しい町屋の各々の空間特性と熱環境を分かりやすく体験でき、自分たちがこれから改修する町屋にどの程度手を入れれば良いかを把握し易くしている。

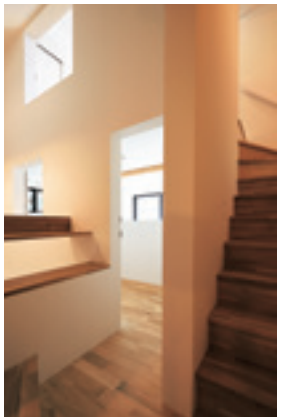
写真11：新築棟中2階　踊り場

写真12：新築棟2階　個室

■終わりに

元気プロジェクトの熱意と行動力の大きな成果の一つが、移住体験施設「さまのこハウス」の竣工であった。こうした地方の小さな町の住民主導の活動及び成果は、疲弊する地方コミュニティの再生における最も輝かしい事例の一つであり、同じ問題を抱える自治会に勇気と希望を与えるものと考える。元気プロジェクトのこれまでの活動が実を結び、町屋を住居兼店舗として改修して、日本料理店やクラフトビールの製造所兼ビアバーを営む方々など四世帯が移住され、街も徐々に活気を取り戻しつつある。現在、春木家を芸術文化学部学生専用のシェアハウスとしてリノベーションする計画が進行中であり、今後も金屋町の町づくりに積極的に関わっていきたいと思う。

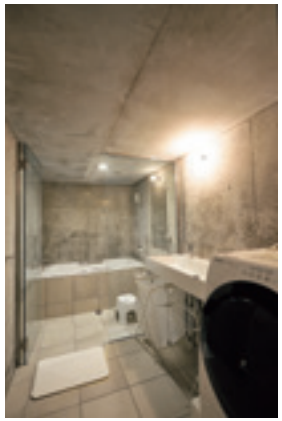
写真13：新築棟地下　浴室

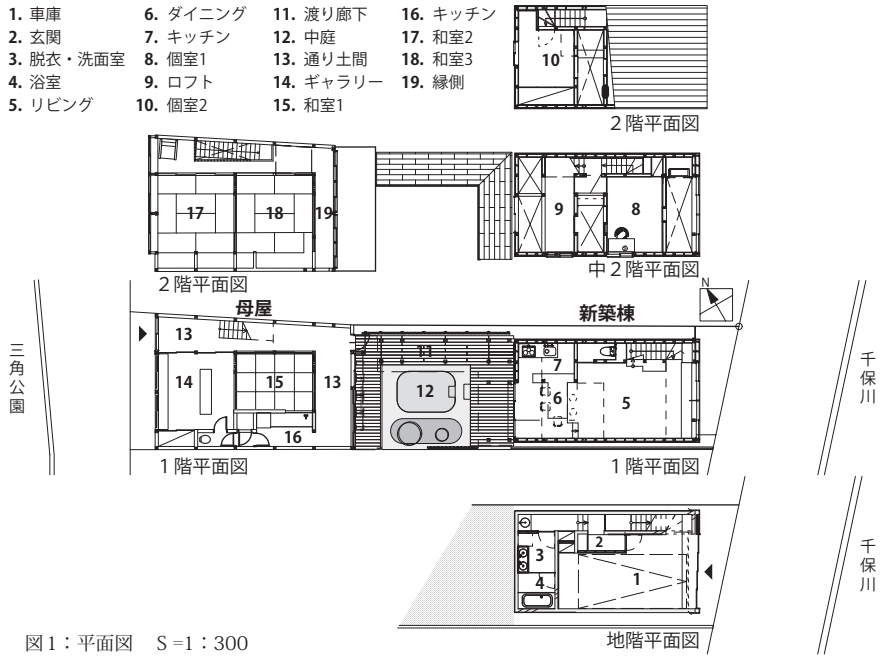

図1：平面図　S =1：300

吉久の町家×芸文
―学生シェアハウス計画の始動―

萩野 紀一郎
KICHIRO HAGINO

1．はじめに

富山大学芸術文化学部（以下、芸文と表記）は現在、「地域とともに生きる」というテーマをもとに様々な地域との連携活動を展開している。「建築再生」の研究・教育・設計を行っている私にとって、高岡、富山、北陸の建築・まちなみ・暮らしは、実に豊かで奥深く、様々な刺激に満ちている。

実際に私自身は、14年前にアメリカから能登半島に引っ越し、里山に暮らしているが、先人の伝統的な暮らしの知恵にふれる機会が多く、日々学ぶことばかりである。また、それが昂じて、伝統知と科学的との出会う場づくりの活動にも没頭している。ただし現実には、高岡の芸文との往復を繰り返し、雑事に追われている日々ではあるが。

自分のことはさておき、建築や地域について学ぶ学生こそ、その地域の中に住み、この地域らしい環境を、頭だけでなく暮らしを通じて肌で感じてほしいと願っている。高岡に通いはじめて2年半、高岡の歴史的な地区のひとつである吉久において、ようやくそのような計画が動き始めたので、この計画が無事に遂行され、地域にとっても学生にとってもいい成果となることを信じて、これまでの経緯を紹介したいと思う。

2．吉久の町屋とまちなみ

高岡市吉久地区は、小矢部川と庄川の河口近くに位置し、江戸時代には砺波・射水地域の年貢米が小矢部川と庄川の水運と馬によって吉久に集められ、伏木港から北前船で日本各地へ送られた。１６６５年には加賀藩直営の御蔵が建てられ、米の集散地として発展した。明治以降も有力な米穀売買倉庫業が何社も展開され、米商の街として栄えた。

吉久の街を貫通する街道は、高岡から射水市の放生津につながる街道で、放生津往来と呼ばれ、江戸あるいは明治の時代から残る町家が今なお建ち並び、往時をしのばせるまちなみを形成している。

明治後期から大正、昭和にかけては、伏木に工場が相次いで建設され、その労働者たちの家が吉久にも多く建てられ、放生津往来沿いだけでなく、伏木よりの北西側に街が広がっていった。

吉久の町屋の多くは平入りで、「さまのこ」と呼ばれる

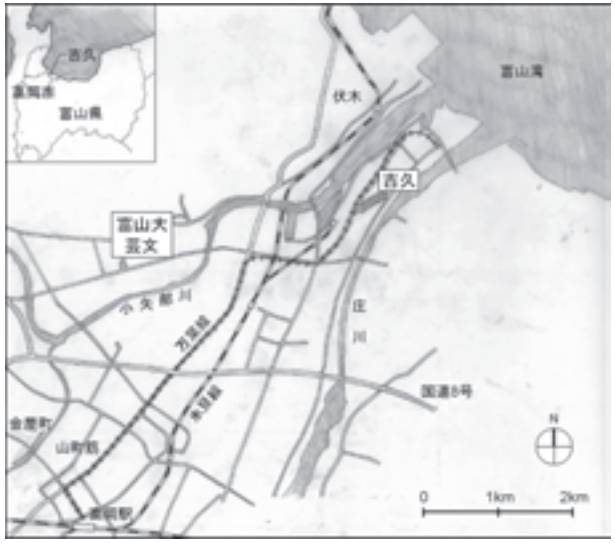

図1：吉久の地図
国土地理院の地図、および山口太郎（2010）「富山県高岡市における歴史的町並み保全の取り組み」をもとに作成

図2：1805年（文化2年）の吉久周辺地図
射水市新湊博物館　高樹文庫所蔵より
（左図にあわせて横向きに掲載）

図3：吉久の町家の建築年代区分図
高岡市教育委員会（1995）「高岡市吉久地区伝統的建造物群調査報告書」より

写真1：吉久のまちなみ
さまのこ（千本格子）が残る伝統的な町家が並ぶ、一方で、建て替えられて前面にガレージが建てられたり、空地も増えてきている

写真2：吉久のさまのこ（千本格子）
他の地域に比べて部材が細く繊細である

千本格子が前面を覆っている。吉久の「さまのこ」は、周囲の歴史的な街並みの町屋に比べて、格子が細く繊細であり、下屋や袖壁とともに、連続的なまちなみを特徴づけている。

江戸時代末から明治・大正にかけて建てられた古い町屋は大屋根の軒が低く、大屋根が厚板葺きの下屋よりも道路側に外に張り出している。一方、昭和以降に建てられた町家は、大屋根が高く二階建てとなり、下屋が瓦葺きで大屋根よりも道路側に張り出している。

また、吉久の町家の間取りは、他地域の町屋同様、間口が狭く、奥行きが深く、光を取り入れるために中庭が設けられ、奥には土蔵を持つ家も多い。家の背面は背戸と呼ばれ、排水などの用水やサービス通路となっている。

このように歴史的なまちなみが残る吉久は、文化遺産としてかなり前から注目され、1993年には伝統的建造物群調査が実施されている。

一方、高度経済成長が終焉を迎えた1990年代バブル崩壊以降、日本じゅうどこにでも見られるように、少子高齢化や生活スタイルの変化、および車社会が進み、吉久においても何棟もの町家が建て替えられ、新建材で仕上げられた母屋が通りからセットバックして建てられ、前面には駐車場がつくられた。また、空き家や空地も増え、「さまのこ」が並ぶまちなみが分断されてきている。

そのような状況下、2011年には、地域の有志たちにより、吉久の歴史的景観の継承と再生をとおして暮らしやすいまちづくりを目指し、「吉久まちづくり推進協議会」が結成された。さらに、2013年には、空き家の有効利用やまちなみの保全活動を行う「NPOみらいプロジェクト」も発足され、2017年には、文化庁の重要伝統的建築群保存地域の指定へ、約8割の住民の同意が得られている。

図4：「さまのこアートinよっさ2016」のパンフレット
毎年秋祭りに合わせて開催

まさに、歴史的なまちなみと、少子高齢化・空き家や空地の増加、この両者のせめぎ合いが今日の吉久で繰り広げられている。吉久の未来は、この両者の着地点を見出し、歴史的なまちなみを保存しながら、新たな生活スタイルにあった環境をいかに確保していくかにかかっているといえる。

3．吉久と芸文との関わり

富山大学芸術文化学部（以下「芸文」と表記）は吉久から近く、僅か三キロメートルほどしか離れていない。また、吉久は万葉線が通り、高岡駅や高岡市街へ公共交通機関が確保されている。

芸文の丸谷芳正名誉教授は、芸文が高岡短期大学であった1990年代から教鞭をとり、木工や家具を中心に教育や研究を行っていたが、伝統的な建物や街並みの残る高岡で暮らしていく間に、家具やインテリアの延長として歴史的な建築やまちなみへの関心を深めていった。特に吉久は、丸谷名誉教授の家具工房の近くに位置し、いくつかのインテリア改修プロジェクトなどを行ったことから、丸谷名誉教授は吉久の人々との親交を深め、徐々に吉久の町家やまちなみの虜となり、ごく自然に街まちなみの保存再生に中心人物として関わるようになっていった。

2008年には、私財を投じて当時空き家になっていた町家（旧津野家）を購入し、ヘリテージマネージャーの育成プログラムとして実測演習の場として活用しながら、時間をかけて調査や保存再生計画を練り、2013年には有形登録文化財の指定を受け、保存改修工事を実施し、ようやく2016年、芸文退職後にその町家に暮らしはじめている。丸谷家（旧津野家）は住まい兼ギャラリーとしてだけなく、「NPO吉久みらいプロジェク

ト」の事務局でもあり、落語会やコンサートなど、地域活動の場のひとつになっている。

このように丸谷名誉教授が10年以上、吉久に関わり続けてきたことに合わせて、吉久と芸文との関係も徐々に深まっていったといえる。例えば、毎年秋祭りに合わせて開催されている、「さまのこアートinよっさ」というイベントにも、芸文生がアート作品を出展したり、さまのこの飾り付けを行ったりしてきた。また、卒業研究や卒業設計などでも、吉久を舞台にしたものも徐々に増えてきている。

写真3：保存改修された丸谷邸（旧津野邸）にて、まちなみや木造建築の保存再生に関するシンポジウム（2016年6月）

写真4：「空間デザインF（インテリア・建築再生）」の設計演習授業
最初に吉久の方々から地域の歴史やまちなみや建築の特徴について現地で話を伺っている（2016年5月）

4．私と吉久との出会い

私が丸谷名誉教授および吉久と出会ったのは、2007年に発生した能登半島地震後に、輪島の土蔵修復活動を行っている時であった。丸谷名誉教授が吉久で購入した津野家に土蔵があり、その修復方法を検討するために、我々が輪島で行っていた土蔵修復プロジェクトに何度も参加していただいた。それが契機となり、私も吉久

図5：「さまのこアートinよっさ2017」の地図
町家の一部を公開し、様々なアート作品が展示される、芸文も2016年から毎年旧藤田家にて学生の設計作品を展示している

を訪れ、2010年に日本建築学会大会に合わせて丸谷家（旧津野家）で開催された保存改修へ向けたイベントに参加し、はじめて吉久を訪れた。

その後、丸谷名誉教授が芸文を退職され、縁あって2016年に私が芸文に赴任することになった。ちょうどその頃、「NPOみらいプロジェクト」が、実際に空き家を所有者から譲渡され、家守としてその空き家を貸し出す事業を開始したので、私がその住民の第1号となり、私も吉久の町家やまちなみの保存に関わるようになった。

私が借りた町家（旧藤田家）は、放生津往来から一本北側の細い通りに面する小さな町家で、大正末期に伏木の労働者のために建てられたといわれている。外まわりはカラートタンに覆われ、「さまのこ」はなく、歴史的な痕跡はそれほど見受けられず、放生津往来に面する歴史的な町家に比べると小さな町家であるが、小屋裏の木構造などを見ると築約90年の歴史がしっかりと感じられる。

5．「建築再生」の設計課題の試み

芸文の建築デザインコースの特徴は、「建築デザイン」だけでなく、「建築再生」、「インテリア」と合わせて、その3つを教育・研究の主要な柱としている点にある。「インテリア」については、高岡短期大学以来、木工や工芸、家具デザインなどに造詣の深い教員が多くいた伝統にも由来している。

一方、「建築再生」は高岡という歴史的なまちなみが残る地域にとって必然のテーマであり、今後、より充実した教育・研究が望まれる分野である。これまで土蔵や民家、あるいは里山の保存修復活動に関わってきた私が芸文に赴任したのも、「建築再生」の教育や研究の充実を期待されてのことと理解している。事実、私が赴任直後から担当することになった設計課題の授業も、3年生前期の「空間デザインF（インテリア・建築再生）」という、建築再生をテーマとする設計課題であった。

設計演習の課題や敷地は授業担当者に一任されていたので、私は迷わず吉久の町家を題材にすることにした。そして、15週間の授業の前半は、町家を実測して図面化する課題に取り組み、後半はその町家を学生たちのシェアハウスにリノベーションする設計とした。

課題の対象とした町家は、これまで3年間の間、年度によって少し変えているが、私が借りている旧藤田邸に加えて、その2軒隣に並んで建つ小さな町家と、放生津往来に面する空き家となっている牧野邸など、地域の

写真5：古い町家の実測作業（2018年5月）

方々のご協力のもと、課題の題材とさせていただいた。

課題に先立ち、丸谷名誉教授はじめ「NPO吉久みらいプロジェクト」の方々に来ていただき、吉久の歴史や町家についてレクチャーをしていただき、まずは地域の歴史や建築の特徴を把握した上で、課題に取り組み始めた。

課題の前半で取り組んだのが、実測と図面化である。これは、土蔵修復や古民家の保存再生の経験から「建築再生」の最も基本であり、最も難しいテクニックと考えるものである。私はこれまで保存再生の実務において何度も実測してきたが、いざ図面を描き始めると、測り忘れた部分があったり、メモが読み取れなかったり、つじつまが合わずに、何度も現場に戻って測り直した経験がある。建築デザインの勉強をし始めて数年ほどの経験しかない学生にとっては、正確に測って、わかりやすくメモを作成し、スケールをもって図面化することだけでもかなり苦戦してしまう。しかし、学生にとって、図面や模型でアイデアを考えるだけでなく、実際の建物に触れながら実測し、実物を目の当たりにする作業は実に新鮮で、特に小屋裏などでの実測は古い木構造を見て感動する学生も多く、実測作業を満喫していた。実測と図面化を通じ、単にそのテクニックを学ぶだけでなく、その作業を通じて、既存の建物の構造やディテールをしっかり

写真6：実測作業を終え一息つく学生たち

と理解することにもつながってほしいと期待してはいるが、まずはこの授業で、その導入程度はできたと思われる。

後半のリノベーション設計として学生シェアハウスを課題に設定した理由は、学生たちにとって、自分たちが住む空間を考えるというのは、極めて身近であり、取り組みやすいと考えたからである。ただ、それだけでなく、まだまだ芸文が吉久に関わりを深めていく余地はあると感じたからである。この段階では、あくまでも空想のプロジェクトとして学生シェアハウスという課題に取り組むことにしたが、そのような課題を行うことで、芸文の学生たちが実際に吉久に住み始める契機とならないかと期待していたからである。

なお、学生シェアハウスを考えた背景として、私が20代から30代にかけて過ごしたアメリカ、フィラデルフィアのペンシルベニア大学では、殆どの学生たちが、大学の周囲の古い町家（ロウハウス）に共同で住んでいたという事実がある。それらの町家には様々なタイプがあり、また賃貸の形式も様々ではあったが、多くは築100年以上の古い組積造の3～4階建ての町家で、表通りから少し上がったところにポーチがあり、そこから入った1階部分には、共同のリビングスペースやキッチンがあり、階段を上がった上階に、各自のスペースがいくつも配されている。各自のスペースの大きさも様々で、1室のものもあれば、何部屋もあるタイプもあった。欧米では浴室やトイレが寝室に付属している場合が多いので、水回りも各自のスペースにそれぞれ設けられていた。学生たちは、個人の空間と、共同の空間、さらには街や地域というコミュニティー、それらがうまく分けられながらも段階的につながっており、学生たちが街やコミュニティーの一部となって、生き生きと暮

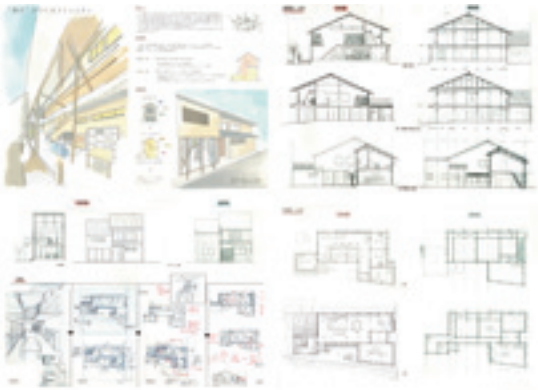

図6：「空間デザインF」の学生設計作品の一例（2018年7月、加味根みのり作成）

写真７：「空間デザインＦ」の学生シェアハウス計画
学生たちが各自の作品を吉久の町家にて地域の方々へプレゼンテーションし、地域の方々から様々な意見を伺った（2016年８月）

写真８：フィラデルフィア、ペンシルベニア大学近くのロウハウス（町家）
多くの学生たちが住む（1995年ころ）

らしていた印象を今でも忘れることはできない。

6．学生シェアハウス計画の始動

２０１６年に芸文に赴任して2年半、吉久を舞台に「建築再生」の実測と設計の演習授業を３回ほど行い、その課題の成果はオープンキャンパスはじめ、機会あるごとに学内外で展示してきた。また、芸文は1学年１１０名ほど、1年生から4年生まで合わせても５００人以下という小規模なので、学年を超えた学生の交流が活発なためのせいか、昨年度や今年度この授業を履修した４年生や３年生から、「1年生数名が町家に住むことに関心がある」という話を今年の夏休みのはじめに耳にした。

富山大学は今年度から教養教育が一本化されたため、これまで芸文生は基本的に4年間、高岡キャンパスですべての授業を履修していたが、２０１８年度からは、1年次のみ月曜から水曜までの３日間は富山市の五福キャンパスで一般教養を学び、木曜と金曜のみ高岡キャンパスで芸術文化の基礎を学ぶこととなった。

そのため、これまでは学生たちは、高岡キャンパスに通うことだけを考えて住まいを決めていたが、２０１８年度の新入生からは、一部の学生は1年次は五福キャンパス付近に住み、２年次から高岡キャンパス近くで住むという選択をした。調査によると、下宿生の約３割ほどらしいが、いずれにしろ、それらの学生は高岡キャンパスで基本的にすべての授業を受ける2年次には、高岡方面へ引っ越す場所を探さなくてはならない。そのような学生たちの一部が、先輩たちから、町家を学生シェアハウスにする設計課題の話を聞き、町家に住むことに関心

を抱いたとのことである。

早速、夏休み中に、３・４年生の有志と、関心を抱いた1年生らと会い、吉久のまちなみやいくつかの町家を案内して話を聞いてみた。彼らは、建築デザインを学ぶ予定の学生たちで、画一的で狭い賃貸アパートより、古くて多少不便でも、古い町家のような場所に共同で住むことに関心をもっているとのこと。早速、３・４年生有志と1年生でプロジェクトチームをつくり、学生シャアハウスの実現に向けて具体的な検討を開始した。

そこでまず考えたのは、私が借りている旧藤田邸を学生シェアハウスにすることである。この町家は、給排水などの設備が整っている上、空間構成上、現状のままでは、他の部屋を通らないと隣の部屋に行けない問題があるが、階段位置を変えて僅かな改修を施すだけで、各部屋へのアクセスが可能となる。

また、私の個人的な事情だが、能越道の整備に伴い一時間半もかからずに能登の自宅と高岡が行き来できるようになった上、能登を対象とした研究や能登での設計実務が動き始めたため、必ずしも私自身は吉久に仮住まいを設ける必要もなく、それよりも学生シェアハウスの実現の方が重要であると考えたからである。

その上、この町家の所有者は、空き家の有効利用やま

写真９：芸文生と「NPO吉久みらいプロジェクト」の理事メンバーとの打合せ
旧藤田家にて学生シェアハウス計画を進めることとなった（2018年10月）

図７：最低限のリノベーションでスタートする学生シェアハウス計画案
移設する階段まわりのイメージ・スケッチ（2018年９月、岡島功洋作成）

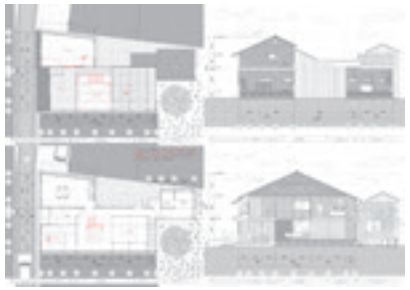

図８：最低限のリノベーションでスタートする学生シェアハウス計画案
平面図と断面図、1階は共有スペースとし、2階に3つの個人空間を配置（2018年８月、岡島功洋作成）

ちなみの保全活動を目指している「ＮＰＯみらいプロジェクト」であり、運営方法などをＮＰＯと一緒に検討していくことで、学生にとっても、ＮＰＯにとってもプラスになる方向性が大いにあると考えられる。

以上のことから、３・４年生のチームリーダーを中心に、まずは最小限の改修で学生シェアハウスにリノベーションするプランを考え、２０１８年10月には、「ＮＰＯみらいプロジェクト」の理事の方々と学生たちと打ち合わせの場を持ち、学生たちが計画について提案し、町家への思いを伝えた。その結果、ＮＰＯの方々も若い学生たちが地域に住むことは大歓迎とのことで、今年度じゅうは試行準備期間とし、建物の改修だけでなく、ルールづくりや資金計画などについて、私やＮＰＯも含めて計画を詰め、来年度からは実際に住み始めようということになった。計画が一過性ものに留まるのではなく、現在計画している学生たちが卒業した後も続けられるような持続可能なものとなるようにしなければいけないことが重要である。しかし、まずは大きな一歩を踏み出したといえよう。

7．最後に　―これからへの期待

今年の10月半ばに、吉久の秋祭りにあわせて実施された「さまのこアートinよっさ」のイベント時には、最初に住み始める予定の1年生3名が旧藤田家に実際に宿泊体験し、これまでに「空間デザインＦ」の学生作品とともに、現時点で計画中の最小限の改修による学生シェアハウスへのリノベーション計画を展示し、地域の方々との交流をスタートさせた。

まだまだ学生シェアハウスは計画が始動した段階だが、今回計画している旧藤田邸以外にも、以前に「空間デザインＦ」で題材にさせていただいた2軒隣の町家が、近いうちに空き家になるということが判明

写真 10：学生シェアハウス・プロジェクトメンバーの芸文１年生たち
彼ら３人が他のメンバーや地域の方々とともに住みながらシェアハウスをつくり上げていく（2018年10月）

した。この町家は氷見の不動産業者が所有しているが、建物の価値が高くなるような改修であれば容認しているという。この町家についてはまだ何も決まっていないので、まだ気が早いかもしれないが、是非、学生シェアハウス計画の第二弾となるポテンシャルもあるので、今後に期待したい。

是非、吉久の学生シェアハウス計画が順調に進み、学生たちが吉久に住みはじめ、学生たちにとっても多くの学びを受け、吉久にとってもいい影響を及ぼしていき、そして何よりこの活動が長く続くことを期待している。

【参考文献】

・高岡市教育委員会（１９９５）「高岡市吉久地区伝統的建造物群調査報告書」
・三沢博昭・宮澤智士（１９９７）「商都高岡の五つの町並み建築美再発見」高岡市
・山口太郎（２０１０）「富山県高岡市における歴史的町並み保全への取り組み―伝統的建造物群保存地区制度に着目して」『地域学研究』23、29–47頁
・吉久まちづくり推進協議会（２０１５）「吉久（よっさ）まち歩きマップ」
・上出麻琴（２０１６）「高岡市とその周辺地域の〝さまのこ〟の地域的特徴」富山大学芸術文化学部卒業研究
・松野慎也（２０１７）「内と外をつなぐ／しきる―高岡市吉久地区の街並み・住宅に関する研究」富山大学芸術文化学部卒業研究
・香山壽夫（１９９０）『都市を造る住居―イギリス・アメリカのタウンハウス』丸善

図９：吉久のまちなみ、立面ドローイングと屋根伏ドローイング（2018年２月、松野慎也作成）

編者・著者紹介

阿久井 康平
あくい　こうへい

富山大学都市デザイン学部都市・交通デザイン学科助教

１９８４年鹿児島県霧島市生まれ、兵庫県西宮市育ち。明石高専・同専攻科、大阪市立大学大学院修士課程修了後、中央復建コンサルタンツ株式会社に入社し、都市計画・デザイン業務、社会基盤施設の設計業務に従事。大阪市立大学大学博士課程修了。博士（工学）。日本学術振興会特別研究員ＤＣ２・ＰＤを経て、２０１７年１月より富山大学大学院理工学研究部（工学）特命助教。２０１８年４月より都市デザイン学部都市・交通デザイン学科助教。専門は都市空間計画・デザイン、景観論、都市・地域計画、都市形成史など。主な受賞歴として２０１７年度前田工学賞など。

鳥越 けい子
とりごえ　けいこ

青山学院大学総合文化政策学部教授

１９５５年東京生まれ。東京藝術大学音楽学部楽理科卒・同大学院音楽研究科音楽学専攻修了。大阪芸術大学大学院より博士（芸術文化学）。専門はサウンドスケープ研究とその考え方の現代日本社会における展開。「サウンドスケープ／形あるもの・見えるモノを超えた環境文化」をテーマに、都市や暮らしをめぐる各種実践と研究に取り組む。富山県下でのデザインプロジェクトには、立山博物館野外施設（六角鬼丈監修）「まんだら遊苑」音環境計画がある。著書に『サウンドスケープ―その思想と実践』『サウンドスケープの詩学』他。

萩野 紀一郎
はぎの　きいちろう

富山大学芸術文化学部准教授、建築家

１９６４年東京生まれ。１９８７年東京大学卒。フルブライト奨学生として１９９４年ペンシルベニア大学大学院修了。１９９７年東京大学にて工学博士。香山アトリエなどを経て１９９８年萩野アトリエ設立。東京、フィラデルフィアで、設計・教育活動後、２００４年能登に移住。住宅やオフィス・店舗の設計から、土蔵や古民家の保存再生の設計やワークショップ、里山のくらしやライフスタイルの実践を試みている。金沢工業大学・金沢美術工芸大・ナンシー建築大学などで非常勤講師を歴任。

林 匡宏
はやし　まさひろ

Commons fun代表、合同会社loki代表、ＮＰＯ法人ＥＳＣＳ代表、ミズベリング江別代表

１９８３年大阪府吹田市生まれ。２００８年筑波大学大学院を修了後、㈱日建設計、㈱北海道日建設計にて都市計画・都市開発コンサルティング等に従事。２０１３年に札幌市立大学大学院博士後期課程で博士論文を執筆し始めたことを契機にＮＰＯを設立し、札幌近郊の河川・道路・空き家等を活用したエリアマネジメントや社会実験を企画するようになる。近年は札幌都心部の暫定敷地や空きビル、商店街などでシェアオフィスやゲストハウスなど継続的な事業運営を行う。議論の内容を即時にイラスト化する「ライブドローイング」という手法を用いて様々なワークショップや検討の場でファシリテーターを務める。

籔谷 祐介
やぶたに　ゆうすけ

富山大学芸術文化学部講師

１９８６年三重県生まれ。筑波大学大学院人間総合科学研究科博士前期課程修了。札幌市立大学大学院博士後期課程単位取得退学。修士（デザイン学）。一級建築士。茨城県デザインセンター、株式会社河野正博建築設計事務所、札幌市立大学教育支援プロジェクトセンター特任助教を経て、２０１８年より現職。専門はコミュニティデザイン、建築計画。主な受賞歴は「いばらきデザインセレクション２０１０ 審査員奨励賞」、「真駒内の未来を考えるまちづくりアイデアコンペ 優秀賞」等。

籔谷 智恵
やぶたに　ちえ

文筆家・着物コーディネータ

１９８４年神奈川県生まれ。慶應義塾大学環境情報学部卒業。ユネスコ無形文化遺産・結城紬の産地問屋在職中に、産地初の小売店を立ち上げる。現在は手仕事に深く関わる仕事を通じて得た経験をもとに、人と自然の関係について探求しながら文章を書いている。２０１８年３月に出産、女児の育児中。
chieyabutani.com

横山 天心
よこやま　てんしん

富山大学芸術文化学部准教授

東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻博士課程満期退学（２００６年）、博士号（工学）取得（２００８年）、富山大学芸術文化学部助教を経て、２０１０年４月講師、２０１６年３月より現職

島添 貴美子
しまぞえ　きみこ

富山大学芸術文化学部准教授

１９６９年生まれ。東京藝術大学大学院音楽研究科博士後期課程修了、博士（音楽学）。２００６年富山大学芸術文化学部講師。２０１１年より現職。専門は民族音楽学、伝統文化論。特に日本の民謡・民俗芸能を研究対象とする。著書は『民謡からみた世界音楽』（共著、ミネルヴァ書房、２０１２年）、『富山の祭り』（共著、桂書房、２０１８年）ほか。２０１５年よりＮＨＫラジオ第２で放送の「音で訪ねるニッポン時空旅」の解説役として出演中。

高岡芸術文化都市構想

都萬麻（つまま）Ⅱ

02

発行日 ―― 二〇一九年三月一五日

発行者 ―― 富山大学芸術文化学部
〒九三三－八五八八
富山県高岡市二上町一八〇
TEL（〇七六六）二五－九一一一

企画・編集 ―― 島添貴美子
デザイン ―― 武山良三
題字・表紙デザイン ―― 中山真由美
印刷所 ―― 能登印刷株式会社
〒九二〇－〇八五五
石川県金沢市武蔵町七－一〇
TEL（〇七六）二三三－二五五〇

©The Faculty of Art and Design, University of Toyama
本書の全部または一部を無断で複写・複製することは、著作権法上の例外を除き禁じられています。複写を希望される場合は、必ず発行者までご連絡ください。

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

ISSN 2433-863X
発行：富山大学芸術文化学部

TSUMAMA II

02

ISSN 2433-863X
発行：富山大学芸術文化学部